
真・恋姫?無双一姫伝・魏

乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫？無双一姫伝・魏

【Nコード】

N3415U

【作者名】

乱

【あらすじ】

突如、恋姫外史へと送られた少女、北郷一姫。ほんごうかずき

この世界において彼女は霸王・華琳と共に何を成すのか。

この作品の主人公北郷一姫は一刀とは何の関係もなく、また一刀も出てきません。

TINAMIにおいて連載していた作品の再構成版で、TINAMIでも連載しています。

第一話「邂逅・霸王と御遣い」（前書き）

突然、外史世界へと迷い込んでしまった少女、
北郷一姫。ほんごうかずき

彼女の魏での物語が、今始まる。

第一話「邂逅・霸王と御遣い」

歴史とは一つの大樹、

その樹からはいくつもの枝（√）が分かれている。

枝（√）とは即ち可能性、

そこにはいくつもの葉（外史）が茂っている。

さあ、これからその一葉に、

新たなる外史への、扉を開こう……

真・恋姫＋無双一姫伝・魏

第一話「邂逅・霸王と御遣い」

広大に広がる大地、その大地を旗を掲げて進軍する軍勢があった。
旗印は【曹】そして二つの【夏】

そしてその軍勢の頭上の空に一筋の流星が流れた。

「……まさか、本当に降るとはね」

「華琳様？」

「管輅の占いですか？」

軍勢の戦闘に立つのは小柄だが、鋭い目線と溢れだす覇気を隠そうともしない一人の少女。

彼女の名は曹操孟徳、真名を『華琳』と言う。

その彼女に付き従う二人の女性。

姉は夏侯惇、真名を『春蘭』妹は夏侯淵、真名を『秋蘭』

少し前、大陸全土に流れた一つの噂話。

『大地乱れ、人々の心に闇が蔽いし時、空に流星流れ、天の御遣い大地に降り立ち、道標となるであろう』

曹操、華琳は見上げていた顔を前に向けるとためらいも無く進み始める。

「さあ、行くわよ、春蘭・秋蘭」

「危険です華琳様、真昼間から流星など、不吉すぎます」

「姉者の言うとおりです、それにあのような怪しげな占いなど信じてよいものか」

「貴女達の言う事ももっともだけど、そんな事を恐れていては霸道は歩めないわ。それに奴らが逃げ去ったのもこの方向、つまりこれは天命という事よ」

「…なるほど、そういう事ですか。分かりました、参りましょう」
「ん？秋蘭、どういう事なのだ？」

一人はまるで分かっていない。

「……はあ」

「……ふう」

二人はため息を付いた。

「な、何なんだ、秋蘭私にもわかるように説明してくれ」

「いいか姉者、天の御遣いの降臨を示す流星が降って来て私達はそれが怪しいと思った」

「ふむふむ」

「しかし、私達が盗賊共を追っているのはその流星が降って来た方向だ、つまりこれは華琳様に御遣いに出会えとの天からの意思ということだ」

「おお、なるほど！では早速まいりましょう華琳様」

「……………はあっ」

二人はため息を付いた。

その頃、

「う、うっゝん」

荒野で目を覚ました一人の少女が、辺りをキョロキョロ見回しながら立ち上がった。

彼女の名は北郷一姫^{ほんごつかずき}、今まさに流星によってこの地に運ばれて来た少女である。

傍には彼女が祖母より与えられた一振りの槍があった。もっともその刀身は鉛によって封印されていたが。

「な、何なの、此処って一体……？」

『キャアアアーーーーッ』

少女が戸惑っているところからか女性の叫び声が聞こえてきた。

「何っ！いい、今の悲鳴只事じゃない」

少女が岩陰から飛び出すと其処は目を疑う様な光景で、女性が血まみれで横たわり、その体を小さな女の子が揺すっていた。

「かかさま、かかさま、かかさまおきて！」

おそらく女性の子供なのだろう、泣きじやくりながら呼びかけていた。

「早く風と一緒に逃げましょう、ここでさやちゃんが死んじゃったらかかさまが悲しみますよ」

姉なのか、女の子を連れて逃げようとしている娘がいた。

「へっへっへっ、無駄無駄、逃げられるわけないだろ、ええ、風ちゃん」

「……人の真名をこつも簡単に汚すとは、救いようのない人達ですね」

「ああそうだよ、だからこんな事も簡単にできるんだぜ」

そういつて男は振りかざした刃を振り下ろそうとした。

「止めなさいっ！！」

「え？」

ガキインッ

私は無我夢中で男と女の子達の間割り込み、その刃を自分の槍で受けとめた。

「なんだ嬢ちゃん、誰かしらねえがそんなナマクラで俺達とやろうつてのかい？」

たしかに私はこの槍の刃を封印している、だがこんな下劣な奴らに負けるなんて微塵も思わなかった。

「あんた達なんかこのままで十分よ、かかってきなさい！」
「このアマツ！！！」

襲いかかって来る盗賊達に向かって槍を横薙ぎに一閃、二人ほど吹き飛ぶ。

「グギヤアッ」
「はああああっ！！！」

続けて二閃、三閃。
「ガハアッ」「ウギヤアッ」

襲って来る男達を相手にしていると段々と人数が増えて来た。

「けっこう手ごわいぞ、周りを囲め！」
「しまったっ！」
「へへへへ、これで終わりだな、やれっ」

男達が一斉に襲い掛かって来たその時。

「させるかー！ー！！」
「ギャアアアアッ」

一人の女性が切り込んで来て数人を切り捨てるとそのまま私の背中を守るように男達に槍を向けた。

「星ちゃん！」

「風、無事か？」

「はい、そのお姉さんのおかげで…でも、さやちゃんのお母さんが…」

「くっ！！おのれ、外道共がー！ーっ！！」

「ひ、ひいいーっ」

星という女性によって盗賊達は瞬く間に蹴散らされていた。

「も、もう駄目だずらかるぞ！」

「ま、まってくだせえアニキ！」

「おいてかないでほしいんだな。」

どさくさにまぎれて男が三人逃げ出そうとしていた、一人の男は何か本のような物を抱えている。

「待ちなさい、逃がさないわよ！！」

「待たれよ、奴らは私が追う、そなたはあの子たちを守っていて下され」

「わ、分かりました」

了承すると彼女は盗賊を追って行った。

「かかさま、かかさま、かかさまー」

女の子はまだ必死になつてすでに事切れた女性にしがみ付いていた、可哀そうだけど言つてあげなくちゃ。

「ねえお嬢ちゃん…もうやめよ、お母さんはもう死んじゃったのよ」

「ひつく、ひつく……え？」

「お姉さん！！」

風と呼ばれていた娘は責めるような目で見てきたがこれは言つてあげなきゃいけない事だから私は言葉を続けた。

「ねえお嬢ちゃん、貴女のお名前は？」

「ひつく、さ、ひつく、ひつく、さ、さやか」

「じゃあさやちゃん、そうやって何時までもお母さんと呼んでるとお母さんは天国に行けないんだよ」

「え…てんごくに、いけないの？」

「うん、お姉ちゃんのお母さんもね、お姉ちゃんが小さい時に死んじゃったんだ。私もさやちゃんみたいに悲しくてずっと泣いていたわ。そしたらある日お母さんが出て来たの」

「おねえちゃんのかかさまに、あえたの？」

「うん。また会えて嬉しかったけど、お母さんはちょっと困った顔をしていたの。私がいつまでも泣いているから心配で天国に行けないって」

「じゃあ、さやがなくてたら、かかさまはさやがしんぱいで、てんごくにいけないの？」

「そうよ、だからお母さんを天国に送つてあげよう。寂しいなら私が付いていてあげる、かかさまにはなつてあげられないけど、お姉

ちゃんにならなつてあげる」

「ほんと、ほんとにさやといってくれる？さやのおねえちゃんになつてくれる？」

「ええ約束よ」

「わかった。さや、かかさまとおわかれする」

そう言つてさやちゃんは母親に駆け寄つた、彼女なりに別れを告げているのだらう。

そんなさやちゃんを見つめていると風と呼ばれた長い金髪で頭の上に爆発な芸術家が創つた塔に似ている人形を乗せている女の子が話しかけて来た。

「すみません、お姉さん」

「え、何で謝るの？」

「お姉さんはさやちゃんの事を思つて言つたのに風はその事に気付かずにお姉さんを責めようとしたのですよ」

「そんな事別に気にしてないわよ。それよりあの子のさやかつて名前はどんな字を書くの？」

「おお、そうでした。これがさやちゃんの名前ですよ」

そう言いながら風さんは地面に「鞘花」と書いた。

「風ーっ！」

そうしていると知り合いなのか誰かが駆け寄つて来た。

「あ、稟ちゃん！」

「大丈夫でしたか？」

「はいー、このお姉さんが助けてくれましたし星ちゃんも駆けつけてくれましたから」

「あ、あのー、風さん。少しお聞きしたい事が」

「ふえっ!？」

「あ、貴女っ、その格好からしてどこかの豪族か貴族かもしれませんがいきなり断りもなく真名を呼ぶとは失礼でしょう」

私が風さんに状況を聞こうとしたら風さんは驚き稟と呼ばれた女性
は顔を真っ赤にして怒って来た。私何かしたっけ？

「え、え、ちょ、ちよつと待って、何を怒っているの？それに、その真名ってなに？」

「ふざけないで！真名を知らないなんてそんな事あるわけが」

「待って下さい稟ちゃん、どうやらこのお姉さんは本当に知らないみたいですよ、それにこんな嘘をつく人には見えません、お姉さん真名というのはその人そのものを表す名前だとえ知っていても本人の承諾なしで決して汚してはいけない聖なる名前なのです。なのでとりあえず私の事は程立とお呼び下さい」

「私は戯志才と名のつております」

「（程立と戯志才？どつかで聞いたような）

『そして俺が宝慧だ、よろしくな』

すると彼女、程立さんの頭に乗っている人形が喋り、自己紹介をして来る。

「へえ、貴女腹話術が上手いのね」

「……そういう切り返しは初めてです」

程立さんは何やらむくれている。変だな、誉めてあげたのに。

そうしているとさっきの星とかいう人が帰って来た。

「面目ない、逃げられた」

「馬でも使われたんですか？」

「ああ、二本足なら逃がしはしないが倍の数ではどうにもならん」

「それより、向うに砂塵が、どうやら官軍が此方に向かつて来ているようです」

「それはやつかいだな、では退散するでしょうか」

「あ、あの、私達はどうすれば」

立ち去ろうとする三人に私は慌てて問いかける。

「お姉さんは風達と来るより官軍に保護してもらった方がいいと思いますよ、さやちゃんもいる事ですし」

「そうですね。元々彼女達とは次の街まで共に旅をしようとしてただけですし」

「それに我らとて目的地が同じと言う訳でもないのだ。そんな当ての無い旅にお主達を連れて行く訳にもいかん」

そう説明を受けていると母親との別れを済ましたのか、さやちゃんが近づいて来た。

「おねえちゃんたち、どこかいつちゃうの？」

私のスカートを掴んでさやちゃんは寂しそうに程立さん達に問いかける。

「すまぬな、出来るならもっと傍に居てやりたいが鞘花達と我らでは進むべき道が違うのだ。それに鞘花には姉になると言ってくれたこの者が居るであらう」

「……うん……ぐすっ」

さやちゃんは涙を拭いながらも小さく頷いた。

「そう言えば、お姉さんの名前を聞いてませんでした。教えてくださいますか？」

「あつ、ゴメンなさい、忘れてました。私は北郷一姫と言います」

「北郷…身なりからして有名な名家と思いましたが聞いた事の無い姓と名ですね。そして一姫が字ですか？」

「姓と名？いえ、北郷が姓で一姫が名前です。私達には字という物はありません、勿論真名も」

「ほう、そうですか」

「星ちゃ〜ん、稟ちゃ〜ん。官軍はもうすぐ其処まで来てますよ。早く行きましょう」

「分かりました、それでは北郷殿、鞘花殿、お達者で」

「北郷殿、我が名は趙雲、字は子龍。いずれまた会う事もあるでしょう。ではさらば！」

「お姉さん〜、さやちゃん〜、お元気で〜」

そう言つて三人は立ち去つて行つた。

離れていく三人にさやちゃんと一緒に手を振っているとふと私は先ほどの名乗りを思い出した。

『我が名は趙雲、字は子龍』

「ちよつと待つて……趙雲つてまさか……ええ〜〜〜っ!!」

「ど、どうしたの？おねえちゃん」

「な、な、何でもないのよ。ゴメンね脅かしちゃって（ち、趙雲つてまさか…）」

「ねえ、おねえちゃん」

「ん。なあに、さやちゃん〜」

「またあえるかな？」

「うん、きつとまた会えるわ」

未だ涙ぐんでいるさやちゃんを優しく撫でてあげるとようやく微笑んでくれた。

妹が居るってこんな感じなんだ。一人っ子だった私には新鮮な感覚だった。

そうして暫くすると

「そのの者、妖しい奴め、名を名乗れ！」

「姉者、そのようにいきなり怒鳴られては委縮して名乗りに名乗れぬぞ」

「むう、しかしだな」

「どうしたの、騒がしいわね」

「華琳様、いけませんこんな所に」

やって来た官軍の女性にいきなりまくし立てられていた所に小さな女の子がこっちに來た、なんか偉いみたいだけどだれだろう？

「なにやら、見た事もない不思議な服装を着たものがいたものです」

「ふゝん、どんな奴？」

「ひょっとして、私の事？」

そう言って彼女の前に出て見たら、

「!!!!」

いきなり固まってしまった。

「華琳様、どうなされたのです、華琳様！」

「はあ……またか」

余談ではあるがこの時一姫は華琳の頭の中では見たはずのないバラに囲まれ見たはずのないシンデレラ風のドレスに身を包み、天使の笑顔でほほ笑む姿に脳内変換されていた。

「華琳様、華琳様！」

「はっ！わ、私は一体」

（また、華琳様の悪い癖が……）

「そのあなた、名前は？」

「は、はいっ、私は一姫、北郷一姫です」

「そう、私は姓を曹、名を操、字は孟徳、そして我が真名は華琳」
「……えっ？」

「「華琳様！」」

「一姫、貴女」

「……はい？」

「私のモノになりなさい！」

「……………はい……………！？」（ち、ちょっと待って、私のモノになれて何？いや、それよりさっきの人が趙雲でこの娘が曹操？そう言えば程立や戯志才って言えば……もしかしてもしかするともしかなくてもこの世界って…三国志？い、一体どうなってるの……………っ！？）

続く!!

《次回予告》

いきなり私のモノになれって、何なのこの華琳って娘。

私にはその気はないんだからね!

とりあえず、華琳のもとで働く事になったんだけど一癖も二癖もある連中ばかり、

そんな中、盗賊討伐に出る事になったんだけど其処でまた新しい出会いが。

次回、第二話「私のお姉様、桂花登場!!」

だから、私にはその気はないの〜!!

「絶対みてよね、兄ちゃん達!!」

第一話「邂逅・霸王と御遣い」（後書き）

ウチの華琳様は、どちらかと言うと無印の華琳様っぽいです。

次回は苟じゆんくの登場です。

第二話「私のお姉様！！桂花登場」（前書き）

桂花登場です。

男の一刀ではなく、女の一姫ですので桂花のデレ度は100%です。

第二話「私のお姉様！！桂花登場」

いきなり何処ともしれない荒野に放り出された私、其処では女の子達が盗賊に襲われていて、なんとか撃退したけど女の子の母親は殺されていた。

泣いている女の子にお姉さんになってあげると約束したけど一緒にいた程立さん、戯才士さん、そして趙雲さんの三人はは官軍が来るとどこかに行ってしまった。

その官軍にいた華琳という女の子は突然とんでもない事を言った、「私のモノになりなさい」と。しかもその名前は曹操孟徳。

もうわけが分からないよ、一体何が起きてるのーっ！？

真・恋姫＋無双一姫伝・魏

第二話「私のお姉様！！桂花登場」

華琳…いえ、曹操と名のつた女の子が私に真名をいきなり預けると傍に居た二人の女性は慌てながら曹操さんに詰め寄っていた。

「か、華琳様、なにを突然真名をお預けになってらっしゃるんですか？」

「そうです、いくらなんでも軽率ですぞ」

「そ、そうね、迂闊だったわ」（どうしたのかしら、いくら可愛いといってもいきなり真名を預けようとするなんて）

まだ、頭がうまく回らないけど何時までもこうしている訳にもいかずとりあえず話を進める事にした。私のモノになれっていうくどりはスルーするとして。

「あ、あのう」

「な、何かしら？」

「何時までもこうしているのも何なので取りあえず落ち着いてお話がしたいんですけど」

「華琳様、話を聞くのであれば場所を移しましょう」

「そうね、一姫と言ったわね、盗賊共はこれで全員なの？」

曹操さんは倒れている盗賊達を横目で見ながら私に聞いて来る。

殆んどが死んでいたけど私は不思議とそれ程の恐怖は感じなかった。死を目の当たりにした恐怖感より彼等に対する嫌悪感が勝っていたらしい。

「いいえ、三人ほど逃げられたわ、そういえばなにか本みたいな物を持ってたみたいだけど」

「それよ！！秋蘭、兵の三分の二を探索に回しなさい、残りは私達と一緒に帰ります。貴女達もいらっしやい、色々と聞きたいことがあるから」

「分かりました、それとこの子のお母さんなんですけど」

「心配はいらん、我々の方で丁重に葬っておこう」

「ありがとうございます、じゃあさやちゃん、行こうか」

「うん、かかさま……ぐすっ…さ、さよなら」

零れる涙を袖で拭いながら別れを口にするさやちゃんを優しく抱きしめるとさやちゃんは私に抱きつき胸の中で声を殺しながら泣いている。

そして私達は曹操さんに連れられて彼女達の本拠地である街へと連れられて行った。

「では改めて聞きましょうか、一姫、あなたの生国はどこ？」

「日本です。東京の浅草という所に住んでいて通っている学校は聖フランチェスカ学園です」

「？にほん？とうきょう？ふらんち…何？」

「貴様ーっ！！訳のわからん事を言って華琳様を愚弄する気か」

「落ち着け姉者、北郷とかいったな、順を追って聞こう、何故あそこにいた？」

「私にも分からないわ、夜に日課の槍の素振りをしていたのは覚えているんだけど気がついたらあの荒野にいて、そうしたら盗賊達がさやちゃん達を襲っていたのよ」

「では、どうやって此処まで来た？」

「それは私が聞きたいわよ」

「華琳様……」

「埒があかないわね」

「何か隠しているに決まっています。こうなったら拷問にかけて本当の事を…」

そう言って私の襟首を掴もうとすると、

「さやのおねえちゃんを、いじめちゃダメー！」

さやちゃんが私を守ろうとして女の人の前に立った。

「その子は？」

「殺された女の人の子供です。鞘花という名前で私が姉になってあげると約束したあげたんです」

さやちゃんは私にしがみ付くと曹操さんを睨み付ける。

「おねえちゃんもさやのおねえちゃんをいじめるの？」

「安心なさい、苛めたりはしないから。少しお話を聞きたいだけよ」
「ほんと？」

「大丈夫よさやちゃん、この人は悪い人じゃないから」

「ありがとう。では改めて、私は姓を曹、名を操、字を孟徳」

「私は夏侯惇、字は元讓。良く覚えておけ」

「私は夏侯淵、字は妙才だ」

「私は姓を北郷、名前が一姫、字という風習は私達には有りません」

「あら、そうなの？そして私は今この陳留の刺史を務めているわ」
「陳留の刺史？魏の国の国王じゃないんですか？」

私がそう言つと曹操さんは目を見開いて驚き、私に詰め寄つて来た。

「！？今、何ていったの、何であなたが魏という国名を知っているの？」

「何でつて三国志を読んで知ってるから」

「三国志？何それ、あなた一体何を…」

「あゝ、ごめんなさい、ちょっと頭が混乱してて、きちんと整理してから話をしますから」

「華琳様、ところでさっきおっしゃっていた魏という国の事ですが」
「そうね、丁度いいからあなた達にも教えておくわ、私はいつまで

も刺史という立場に甘んじているつもりはないの、いずれは王として国を興すつもりよ」

「なるほど、魏というのはその国の名ということですね」

「そういうことよ。チラリ（ああ、一姫…やっぱりこの娘は可愛いわ、早く閨に連れ込んで…いいえ私は霸王曹孟徳、威厳を持たないと、ああ、でも）」

「……はあ……」

肩を抱え込んで一人悶えている華琳を見て、秋蘭は重い溜息を付くのであった。

「……つまり、お前は这个世界、というよりこの時代の人間ではないということか」

「ええ、そう考えなければ話の辻褄があわないのよ、この時代の王朝って漢王朝でしょ。漢王朝の出来事って私達の時代ではおよそ千八百年前の話なのよ」

「……むゝん」

「…分かってないようね」

「あたりまえだ、こんな突拍子のない話」

「そうね、例えばね夏侯惇、あなたがどこか訳の分からない場所に連れて行かれて、項羽や劉邦に会ったと考えてみて、それが今の私の状況なの」

「な、何と!」

「確かにそれならば、北郷が華琳様の考えていた魏という国名を知っていたことも説明がつくな」

「だが、貴様はどうやってそんな技を成し遂げたのだ、それこそ五湖の妖術ではないか」

「それは分からないわ、何かの事故に巻き込まれたのか、本当にそ

んな妖術をかけられたのか、私が知りたくらいよ」

「南華老仙の言葉にこんながあるわ、莊周が夢を見て蝶となり、蝶として大いに楽しんだ後眼が覚める。しかしそれは莊周が見た夢なのか、それとも今の自分が蝶が見ている夢なのか、それは誰にも説明できないの」

「胡蝶の夢、ですね…」

「へえ、よく知ってるわね」

「学校の授業で習ったばかりですから」

「がっこう？何それ」

「ええっと、皆で集まって色々な勉強をする所かな」

「私塾のこと？」

「まあそんな所です、私達の時代ではそれを国が運営して、義務教育として国民全員が勉強してるんです」

「なるほど、最低限の学力を身に付けさせるには、悪くない方法ね」
「しかし、そうすると我々は北郷が見ている夢の登場人物という事でしょうか？」

「逆かもしれないわよ」

「たしかに、私が見ている夢の可能性もあるわね。（もしそうなら、あんな事やこんな事を……）」

「……華琳様…」

「…じとー」

「おねえちゃん、ヨダレたれてる」

「…コホン、一姫、貴女私の下で働きなさい。貴女が言う未来の知識、上手く使えば私の覇業の大きな助けになるでしょうね」

「その前に聞きたいんですけど、貴女は何のために天下を求めるのですか？」

「私の愛すべき民のためよ、彼らが笑って平和に暮らしていける国を作るため」

「…分かりました、曹操さんを信じます。私でいいなら力にならせてもらいます」

「良い心がけね、それとそんなにかしこまった言葉で話さなくてもいいわよ。普通に話しなさい」

「良いんですか？」

「華琳様！…この様な者にそんな…もったいなさすぎます」

「口出しは無用よ春蘭。私が良いと言っているんだから良いのよ」

「うう、しよんなあ」

「ああ、しよげる姉者は可愛いなあ」

華琳への進言を咎められ、落ち込む春蘭を秋蘭は微笑ましそうに見つめていた。

「ふう、良かった。正直あの喋り方は肩が凝って仕方無かったです」

「ふふふ、なら部屋を準備させるから好きに使いなさい」

「さや、おねえちゃんといっしょー」

「ええ、一緒よ」

「わーい」

（それじゃ私が忍びこめないじゃない）

「そ、そういえば一姫の真名を聞いていなかったわね、教えてくれるかしら」

「うーん、さつき盗賊達から助けてくれた人達に聞いたんだけど私にはその真名ってないのよ、あえていうなら一姫が私の真名と言う事になるのかな？」

「！」

「な、何と」

「む」

「…？どうしたの三人とも」

「いや、少々予想外だったものでな」

「ならば、貴様は初対面の我々にいきなり真名を呼ばせる事を許していたというのか？」

「貴女達の流儀に従うならそういうことになるわね」

「「むうー」」

「そう、なら私達もあなたに真名を預けなければ不公平ね」

「え？いいの」

「もちろん、では改めて私の真名は華琳、これからは華琳と呼びなさい」

「私の真名は秋蘭だ。よろしくたのむ」

「し、秋蘭まで、しかたない、私は春蘭だ」

「わたしはさやかー」

「そう、よろしくね、さやか」

こうして私は華琳の下で働く事になった。しかし、彼女が私を見る目は学園の先輩達が私を見るそれと同じであった、いや、むしろえ〜ん。

それから数週間が立ち、私は秋蘭にこの時代の文字などを習いながら何とか上手くやっていた。

そして近隣の村などを襲っている賊討伐の出陣を翌日に控え、慌ただしい日々が続いていた。

「あ、いたいた華琳ー！頼まれていた装備品と兵の確認だけど滞りなく済んだわよ。これが報告書」

「ありがとう、一姫もようやく仕事に慣れてきたみたいね」

「その程度の仕事、出来て当たり前だ、華琳様に褒められたからといって図に乗るなよ」

「…その春蘭には糧食の最終点検の帳簿を受け取って来るように言っておいたと思うんだけど？」

「あ、申し訳ありません。すぐに受け取ってまいります!!」
「…姉者……」

帳簿を取りに来た春蘭だが、肝心の帳簿が何処にあるのか判らずに近くに居た作業をしている少女に声をかけた。

「おい、そこのお前」

「……」

「聞こえんのか、おい」

「……」

「返事をせんか、おーい!」

「聞こえているわよ、何なのよさつきから」

「聞こえているなら返事をすればよからう」

「アンタなんかには用はないもの、忙しいんだから邪魔しないで!」

「何だとう!」

「何よ!」

「まったく、春蘭は何をやっているのよ」

私は華琳に頼まれて帰って来ない春蘭を探しに来た、すると春蘭が誰かと言ひ合いをしてるのが聞こえて来て、何か小さな女の子といがみ合っていた。

「春蘭！一体何してるのよ、華琳が待っているわよ」

「北郷、おおっ！そうであつた」

「何よ、また誰か邪魔をし……に……」

女の子は何やら呆けた顔をして私を見ている、その目には見覚えがあつた、学園の下級生と同じなのだ。

そしてその頬は徐々に赤みを増し、瞳はキラキラと輝き出した。

（ああ、この子もなのか……）

「糧食の再点検帳簿を受け取りに来たんだけど、監察官って人が何処に居るか知らない？」

「はいっ私です。これが帳簿です！……」

そう言つて帳簿を渡してくれたがどさくさにまぎれて手を重ねて来る事は忘れなかつた。

「あ、ありがとう……」

「あ、あのう……ひよつとしてあなたが天の御遣い様ですか？」

「ええ、そうだけど」

「やっぱり、噂通りの美しさです！」

「あはは、ありがとう。じゃあ急ぐからこれでね、春蘭行くわよ」

握りしめている手をなるだけ優しく外すと引きつった笑顔でその場を後にした。

「ああ、早く曹操様だけじゃなくあの方にもお仕えしたい」

少女は離れていく一姫の背中を見送りながらそう呟いた。

「…なあ北郷、さっきの娘、なんか私とお前では態度が違いすぎる気がするんだが？」

「…気にしない方が幸せよ……」

「そ、そうか？」

「はい、華琳。帳簿を持って来たわよ」

「ありがとう、一姫。ご褒美に今夜闇にいらっしやい、可愛がつてあげるから」

「丁重にお断りするわ」

「あ、あのー、華琳様。わ、私は…」

「ん？何かしら、夏候元讓」

ピシャアアアーーーーーッ！

真名ではなく、姓と字で呼ばれた春蘭は何処かの親馬鹿神魔王の様に雷が堕ちた様なショックに固まり、噴き出す涙を拭う事無く泣き叫びながら走り去って行った。

「うわあああ~~~~~んっ、華琳しゃまに嫌われたあ~~~~~っ！！」

「い、いいの華琳？ちよつと可哀想じゃ無い？」

「大丈夫よ。何時もの事だし、しばらくしたらケロッとして帰って

来るから」

「ああ、泣きながら走り去る姉者も可愛いなあ」

「秋蘭、貴女ね……」

小さくなつていく春蘭の背中を見送っている秋蘭を溜息交じりで見ていると突然帳簿を確認していた華琳の雰囲気が変わった。

「秋蘭」

「はっ」

呆けていても華琳の呼び声には瞬時に反応する。感心していいのかわからないが流石だ。

「この帳簿を作成した監察官を今すぐ此処へ呼びなさい」

「御意」

何があつたのか聞こうとしたが何時もとは違い、何かピリピリしている様で声をかけられる感じじゃ無かった。

しばらく待っていると秋蘭がさっきの女の子を連れて戻って来た。

「華琳様、この者です」

「お前が食料の調達をしたのか？」

「はい、必要十分な量は調達したつもりですが何か問題でもありませんでしたでしょうか？」

「必要十分？これが？…どう言つつもり、指定した半分の量しか用意できてないじゃない」

へ、糧食が半分しか無い？それはまずいでしょう、華琳が怒るのも無理はないわ。

「もしこのまま出陣したとしたら途中で糧食不足に陥り行き倒れになる所だったわ。そうなったとしたらどう責任を取るつもりだったのかしら？」

「いえ、そうはなりません。…ご説明してもよろしいでしょうか？」

「許す、話さない。もし納得できなければ…分かってるわね」

「御意。その時はこの頸、遠慮なくお切り下さい。まずは曹操様は慎重なお方、必ず御自分の目で糧食の最終確認を行います。そこで問題があればこうして責任者を呼ばれます、行き倒れにはなりません」

「なっ！！私を馬鹿にしてるの？春蘭！！」

「はっ！！」

一気に頭に血がのぼったのか春蘭に切り捨てさせようとする。

……と言つか春蘭、貴女何時の間に……

「ちょっと待って華琳！！まだ説明の途中よ、最後まで聞きましょうよ」

「…そうだったわね、続けなさい」

「はっ！ありがとうございます」

「ちっ！」

春蘭はまださっきの事を根に持っているのか、舌打ちをしながら剣をしまう。

女の子は女の子である目で私を見つめて来る。

「そして糧食が少なくなれば身軽になり、輸送部隊を含む全体の進軍速度は上がり移動にかかる時間を減らす事が出来ます」

「ん？しかし、移動にかかる時間が減った所で討伐にかかる時間が減るわけではなし、あまり変わらないのではないか？」

春蘭がそう言った瞬間、辺り一帯の時間が止まった。
気のせいかな、作業をしている兵士達の動きも一瞬止まった様な……
そして、時は動き出す。

「どうかなさりましたか？曹操様」

「い、いえ、何でもないわ。話を続けなさい」

「は、はい……」

女の子は小首を傾げていたが、話を続けようとする。まあ、春蘭の事を良く知らないから仕方ないだろう。

秋蘭といえば……

「ち、違う。あんなに頭の回る姉者は姉者じゃない……」

そんな事を呟きながら頭を抱えていた。…何気に酷くない、貴女。

「そしてこれが最後の理由ですが、私の提案する策をとれば戦闘時間は更に短くなるでしょう。よって、この量でも十分と判断いたしました」

私の提案する策って……この子まさか華琳を。

「曹操様、どうかこの私、荀じゆんいを曹操様の軍師として麾下にお加え下さい！―」

え？……荀じゆんい？！？荀じゆんい？ってあの魏の軍師の？

それより驚いた。この子、あろう事か華琳の事を……

「荀？、貴女の真名は？」

「はっ、桂花にございます」

「そう、桂花…貴女…」

華琳は秋蘭から受け取った愛用の鎌、”絶”を荀？の首ギリギリに当てると殺気を隠そうともせずに言葉を続ける。

「この曹操を試したわね」

「はい」

「なっ！このいけしゃあしゃあと。その頸、叩き落としてくれる！」

「ちょ…春蘭、落ち着きなさい。まだ話は終わって無いのよ」

「は、離せ北郷…！」

「春蘭」

「うう、はい…」

羽交い絞めにした春蘭はそれでも暴れていたが、華琳の一言で大人しくなる。

そして、荀？の私を見る目は更にキラキラ度を増していた。…もうイヤ。

「桂花。私はね、何よりも他人に試されるというのが嫌なのよ。それを分かったの事かしら？」

「はい、それを承知の上であえて試させていただきました。勿論切り捨てられる事を覚悟の上で」

そして華琳は絶の刃を荀？の首に当て、首の一筋の傷から血が流れて来る。

しかし荀？は身動き一つせずに華琳の目を見つめている。そして…

[illegible]

華琳は突然笑い出すと絶を荀？の首から離し、肩に担ぎ直す。

「氣にいったわ桂花。貴女のその覺悟と自信、偽りではなさそうね。桂花！今日より戦列に加わりその智謀、この曹孟徳の為に使いなさい」

「御意っ！喜んで」

何とか上手くまとまっ
たみたいでほっとした。
まったく、心臓に悪
いったら無いわ。

「ちよつと大丈夫、
荀？」じゅんいく

私は血が流れている彼女の首にハンカチを当てながらそう聞くと、彼女は突如私の手を握りしめて来た。

しまった！傷が心配で忘れていた、この子は”あっち側”だったん
 だった。

「ああ、御遣い様！！それほどまでに私の事を心配して下さいですね。感謝です！！」

「まあ……ね。それほど大した傷じゃないみたいだしもう大丈夫ね。じゃあ、忙しいからこれでね、荀^{じゅんい}？」

そう言い、離れようとするが荀じゅんの手はまるで吸い付いたかのよう
に私の手を離そうとはしなかった。

「待つて下さい！私には姓を荀、名を？、字は文若、真名を桂花と
います。ぜひ我が真名をお預かりください」

「わ、分かったわ桂花。じゃあ私の事も一姫でいいわ、じゃあ、こ

れで…」

これで…と離れようとしたが、やはり桂花は私を離してはくれなかった。

「あ、あのー、お願いがあるんですけど」

「な、何かしら？」

「お姉様とお呼びしてもよろしいですか!？」

「…良いわよ」

「ありがとうございます、お姉様!！」

正直、勘弁してくれという感じだったがOKしてあげないと何時までも諦めそうにも無かったので許してあげる事にした。

……華琳が何だか羨ましそうに指を加えて見て来るのは気のせいよね、そうに違いない。

そうに決めた……

翌日、私達は賊討伐の為に陳留の街を後に進軍を開始した。

さやちゃんも寂しそうにしていたが流石に連れて行くわけにはいかない、ぐずるさやちゃんを何とか説得すると泣きながらも何とか納得してくれた。

半日ほど進んだ所で休憩の為に進軍は止まり、私は傍に居る桂花に話しかけた。

「ねえ桂花、本当に糧食は半分でいいの？華琳なら本当に首を切る

わよ、

「ああ、お姉様、そこまで私を心配して下さいですね。大丈夫です、私の策は完璧です」

「そう？ならいいんだけども」

桂花は甘えるように私の腕にしがみ付いている。どうして私はこうも女の子にもてるんだろう？華琳は華琳で毎夜毎夜、閨に引きずり込もうとするし。

「おお、此処にいたかお前達。華琳様がお呼びだ、すぐに来い」

「華琳が？分かったわ、行きましょう」

「はい！」

そうして私と桂花は春蘭に連れられて華琳の元へと走って行く。

「どうしたの華琳」

「来たわね、丁度偵察も帰って来たところよ、報告を」

「はっ！行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗もなく格好もまちまちなため目的の盗賊集団の一部と思われます」

「ならもう一度偵察を出しましょう。春蘭、それと一姫、お願い」

「はっ！」

「了解！」

「気を付けてくださいね、お姉様」

「北郷、姉者の手綱をしっかりとつかんでおいてくれよ」

「秋蘭…」

「お願いね」

「華琳様まで…」

しばらく進むと盗賊達と思われる集団が見えてきたが何かと闘っているようだ。

偵察を出そうと思っていたら。

ドゴーーンッ！！

ものすごい音と共に何人かが吹き飛んだ。

「このー！ボクはお前らなんかに負けないぞー！ー！！」

「お、おい北郷、何なのだあの娘は？」

「私に聞かないでよ」

そこには小さな体で巨大な鉄球を振り回す一人の女の子が居た。

「村はボクが守るんだー！！」

続く

あとがき

という訳で再構成版第二話でした。

色々と修正や書き足しをしてみましたけどどうだったでしょう？
前回は詳しく書かなくても皆分かっているだろうから大丈夫だろう

と省略した華琳と桂花の会話ですがあえて書き足してみました。

ゲームを再プレイしながら書いたので少しずつ変えています。

袁紹の件はやはり省略、別にそれほど重要な部分でも無いですしね。

それとまあ、桂花のデレ度が上がりました。

桂花にとって華琳は尊敬に値する人物ですが一姫はもはや崇拜の対象にまでなっています。

分かりやすく言うなら桂花は、華琳ラブですが一姫は激ラブという事です。

では次回も頑張りまっしょいっ！！

《次回予告》

たった一人で盗賊達と闘っていた少女許緒。

「官軍なんか信じられるものか！」

そして華琳は彼女に言う。

「私はいつかこの国の王となる、あなたの村を守るためにも力を貸して」

そうね、みんなを笑顔にするために私も。

次回、第三話「新しい仲間・そして、明日の為の笑顔」

「絶対見てよね、約束したよ！！」

第二話「私のお姉様！！桂花登場」（後書き）

次回は季衣が登場です。

第三話「新しい仲間・そして、明日の為の涙」(前書き)

許緒・季衣が仲間になります。

そして、一姫が遂に……

第三話「新しい仲間・そして、明日の為の涙」

いきなり三国志の世界に放り出された私は、母親を殺された鞘花という女の子を助けた後

曹孟徳…華琳の下で双子の姉妹、夏侯惇…春蘭、夏侯淵…秋蘭、と一緒に働く事になった。

そんなある日、盗賊討伐に出陣する事になったんだけど其処で出会ったのが荀…桂花。

華琳を試したりして怒らせるようなまねをしたけど何とか軍師として採用された。

そして、行軍中にあらわれた盗賊達を偵察していた私と春蘭の前で一人の女の子が闘っていた。

「お前達なんかには村は襲わせないぞー！！！」

真・恋姫？無双一姫伝・魏

第三話「新しき仲間、そして明日の為の涙」

私達はその光景に啞然としていた。

一人の小柄な少女が盗賊達を次々となぎ倒しているのだから。

「おお、何と勇敢な少女だ。私も負けてはおれん！」

そう言つて春蘭はまっすぐに盗賊達の所に走つて行つた。

「ち、ちよつと春蘭待ちなさい！はあ、まったく猪なんだから。ねえ、貴方達の中で一番早いのは誰？」

「はっ私です。馬の扱いには自信があります。」

私の問いに一人の兵士が答えて来た。

「そう？じゃあこれから私と春蘭で盗賊達を適当に蹴散らして何人か逃がすから後をつけて連中の拠点を見つけてちょうだい」

「了解しました！」

「残りはここで待機、後で来るか」…曹操様に報告をしてちょうだい」

「了解！！」

そう言つて私は春蘭の後を追いかけた。

「…いくら盗賊とはいつてもやつぱり人を傷つけるのは怖い。…でもそんな弱音を言つてる場合じゃない、覚悟を決めなくちゃ」

シュルツ

私は腕から外したスカーフで髪をポニーテールにまとめて戦闘準備をととのえた。

「うりゃあー！！」

ドガガーン！

「相手は一人のガキだ、周りを囲んで一気に畳み掛ける！」

「く、くそう！」

「今だっ、かかれー！」

「やらせるかー！」

ズバツザシュツザシュツ

春蘭が盗賊達を切り捨てながら少女の元に辿り着いた。

「大丈夫か、勇敢な少女よ。遅ればせながら私も手を貸すぞ」

「あ、ありがとう」

「礼などいらぬ、大の大人が少女一人を相手に群れをなして襲いかかるとは、恥を知れ！この場で全員皆殺しにしてくれる」

「待ちなさい！全滅させたらダメでしょ、私達の任務は偵察なのよ」

（わ、また来た。今度は綺麗な姉ちゃんだな）

「ここで全滅させれば偵察の必要はなかるう」

「これで全員の訳がないでしょう、何人か逃がして連中の拠点まで案内させるのよ」

「おお、なるほど」

「じゃあ行くわよ、はああー！」

「とおりゃー！」

「うりゃああー！」

「ひいひいー！」

そして予定通り何人かは逃げ出し、その後を偵察の為の兵士が追い

かけて行く。あとは偵察が戻って来るのを待つだけだ。

「あの、ありがとう！おかげで助かったよ」

「礼などいらぬといったであらう」

「そうよ、私は北郷。貴女は？」

「ボクは許緒」

「私は夏侯惇だ」

自己紹介をしていると、華琳達本隊が追い付いて来た。

「一姫、春蘭、御苦労さま」

「お姉様――！！ご無事ですか――！？」

「！！！！」

華琳の率いる軍勢を見ると、突然許緒の表情が固くなった。

「一姫、奴らの拠点は分かった？」

「ただだけど、逃げ出した奴らを追いかけさせたからじきに見つかると思うわ」

「何、何時の間にそんな事を？」

「貴女が後先考えず飛び出した後に兵士に頼んでおいたのよ」

「さすが一姫ね、頼りになるわ」

華琳と会話をしていると許緒が険しい表情のまま近づいて来た。

「ねえ、お姉さん官軍の人？」

「ええ、そうだけど何？」

「やっぱり…、ええーい！」

そうだと答えると許緒は突然華琳に襲いかかった。

ガキイイイイイン！！

許緒が投げ放った鉄球を私と春蘭が何とか受け止める。

「くっっ」

「うぬっっ！！許緒、貴様！！」

「ど、どうしたのよ許緒、いきなり何をするの？」

「官軍なんかが何しに来たんだ！！払える税金なんかないぞ！盗賊達に襲われてみんな生きてだけで精一杯なんだ」

「ちよっと待つてよ、私達はその盗賊達を討伐する為に陳留から来たのよ、税金を取りに来たんじゃないの」

私がそう言うと、許緒の強張った表情は呆然とした感じに変わり、溢れんばかりの闘気は空気の抜けた風船の様に小さくなっていく。

「えっ陳留から……ご、ごめんなさい！ボク聞いたことあります。陳留の刺史様は民の事を一生懸命考えてくれる立派な人だって、そんな人にボクとんでもない事を…」

許緒はそう言いながら鉄球を手放すと華琳に頭を下げながら謝罪をする、

「いいのよ、貴女達の様な弱い民達を食い物にする屑共が居るのは間違いのない事実なんですから。許緒と言ったわね、貴女のその力、私に貸してくれないかしら？」

「ボクの力を？」

「ええ、私はいずれこの大陸の王となるわ。その為には力が必要なの、まずは貴女の村を苦しめている愚かな盗賊共を退治するのを手伝ってくれないかしら」

「はい、ボクでいいなら喜んで！」

「良かったわね、許緒」

「うん、ありがとう姉ちゃん。それとこれからは仲間なんだからボクの事は季衣でいいよ」

（うつゝ、お姉様のことをなれなれしく姉ちゃんなんて…羨ましい……）

「ならば、私の真名も預けないとね。季衣、これからは私の事は華琳と呼びなさい」

「私は一姫よ。よろしくね、季衣」

「私は春蘭だ。季衣よ、これから共に華琳様を守ろうではないか」

「私は夏侯淵、真名は秋蘭だ。頼りにするぞ、季衣」

「私は桂花よ」

「うん、よろしくね。春蘭様、秋蘭様、桂花様、姉ちゃん」

「ちょっと、貴女！！何でお姉様の呼び方だけ姉ちゃんなのよ！？」

「ボク、姉ちゃんが居ないから姉みたいな人に憧れていたんだ。ダメ…かな、姉ち…一姫様？」

季衣は潤んだ瞳で指を咥えながら見上げて来る。

……か、可愛いじゃない。

「別に構わないわよ。私も妹が増えて嬉しいわ」

「やったーっ！！ありがとう、姉ちゃん」

季衣は輝く様な笑顔で私に抱きついて来た。うつゝ、可愛すぎ。

…だから華琳、羨ましそうに指を咥えながら見て来るのは止めなさい。

そしてまもなく盗賊達の拠点が見つかったという報告が入って来た。

ワアアアアアー！！！！

盗賊達との闘いはほぼ一方的だった、何の策もなく力任せに襲いかかって来る盗賊達に軍としての正式な訓練を受けた兵士達が負けるわけがなかった。

そうして私と秋蘭は盗賊団の首領を追い詰めた。

「もう逃げられんぞ、大人しく投降しろ！」

「くそう、やなこった！オレはまだまだ面白可笑しく暮らしたいんだ、こんなところで捕まってたまるか！」

ピクンッ

今、この男は何と言った？

「…面白可笑しく？……」

ヒイイイイイイン

心の奥底から湧きあがって来る怒りに呼応するかの様に私の持つ槍が低い音を立てながら震えている。

（ん、何だこの音は？何処から聞こえて来る？）

一姫と共に闘っていた秋蘭の耳に何か低く唸る音が聞こえて来た。

「何が面白いの?……」

ヒイイイイイイイン

一姫は盗賊の頭領に一步足を踏み出す。

「何が可笑しいの?……」

ヒイイイイイイイイン

また一步、また一步と近づいて行く。

「ひ、ひいひい……」

「人の命を、人の幸せを……」

ヒイイイイイイイイン

一姫が近づいて来る度に頭領の顔は青ざめて行く。

「人の笑顔を奪うのがそんなに楽しいの?……」

ヒイイイイイイイイン

「く、来るな……来ないでくれえ……」

男は一步も動けず、その足は震え、逃げる事も出来ないでいる。
ふと秋蘭が一姫の槍を見ると小刻みに震えていた。

（何だ、槍が鳴いているのか？）

「許せない、面白半分に人の命を奪うなんて……絶対に許さない！」

「……姫……？」

「い、嫌だ、嫌だ、嫌だあ——っ！！死にたくねえ——、助けてくれえ——っ！！」

ブンブンブンブンブン

一姫は体の前で槍を高速で回転させ、その烈風で真空状態を作り出す。

そして横薙ぎに一閃、無数の真空の刃が泣きながら命乞いを繰り返す哀れな男に襲いかかる。

朱雀・烈風刃波！！

ズ
バ
バ
バ
バ
ー
ー
ー
ー
ッ

「ギャアアアアアーッ」

男の体は幾重のも真空の刃にズタズタに切り裂かれ、まもなく息絶えた。

「ハアハアハアハア……」

ヒ
イ
イ
イ
イ
...

一姫の槍は男の命が尽きるのと同時にその鳴動も消えて行く。

（あの槍は一姫の怒りに反応して鳴動したのか、一体あの槍は……）

暫くして賊の討伐は終り、一姫は岩へと腰を下ろし自分の手を見つめていた。

その顔は今にでも倒れそうな位に真っ青であった。

……殺した？誰を？誰が？私が？この手で？……

「大丈夫ですかお姉様？顔色が悪いですよ」

「姉ちゃん……」

桂花と季衣が心配そうな顔で覗いて来る。
だらしのない私、覚悟は……していた筈なのに。

「大丈夫よ、ちょっと疲れただけだから」

「だらしのないな、この程度の戦闘で」

「あはは……そうね……」

「……本当に大丈夫か？」

「そう、一姫にそれほどの力が…」
「はい、それにあの槍にも何か隠れた力が」
「それでも一姫が私達の仲間であることに変わりはないわ」
「それは私も信じています、ですが…」
「待ちましよう、一姫が話してくれるのを」
「はい」

こうして盗賊討伐を終えた私達は季衣という新しい仲間を加えて陳留への帰路についた。

城に戻った私は体を引きずるように部屋に戻った。
扉を開き、部屋の中に入るとささやちゃんが駆け寄り抱きついて来た。

「あつ、おねえちゃん、おかえりなさい！」
「ただいま、さやちゃん」

ああ、帰って来たんだ。この場所に、何時もの日常に。
しかし、あの“現実”が変わる訳でも無く、さやちゃんの笑顔の向こう側にあの死に顔が見える。

「???おねえちゃん、どこかいたいの？」
「……え、どうして？」
「だっておねえちゃん、なんかいたそうなおかおをしてるよ?」
「…そんなに痛そう?」
「うん、だからね」

そう言つてさやちゃんは寝台に座つて膝を叩きながら言つた。

「ここにねて。さやがいたい、いたい、のとんでけーってしてあげる」
「……………さやちゃん…ありがとう…」

さやちゃんの言葉に甘えて私は彼女の膝を借りる。
そうしてると何か目の奥が熱くなつて来て仕様が無い。

「ねえさやちゃん、おねえちゃん、泣いてもいいかな？」

「うん、いいよ。だいじょうぶだよ、さやがそばにいるからおねえちゃんのかかさまも、しんぱいはしないよ」

「うん、…………グスッ…」

「いたい、いたい、のとんでいけー」

そう言つてさやちゃんは優しく頭を撫でてくれた。

「ううう…うええ…うわあああああーん！」

「いたい、いたい、のとんでいけー」

「うわあああーん！ーん！」

うわあああーん！ーん！

華琳は部屋の外でその泣き声を聞いていた。

（ごめんなさい一姫、優しい貴女に人を殺めるなんて辛い重荷を負わせる事になつて、でも私達に歩みを止めてる余裕はないの、人々の明日の笑顔の為にも…）

その思いを残して華琳は部屋を後にした。

「うわああああー……ん！」

少女は泣いた。

人を殺めた罪から逃げる為では無く、それを受け入れて前に進む為に……

明日を迎える為に、今はひたすら泣いた……

続く

《次回予告》

闘いの中で殺めてしまった命。

だけど私は明日へと歩いて行く。

そして、そんな中での穏やかな日常。

護って行きたい、護って行かなければいけない仲間達。
大事な仲間たちとの掛け替えの無い日々。

次回、第四話「華琳達の日常、そして病^やみしモノの降臨」

チヨット、カリン。ソレニキイトケイファ……。オハナシシマシヨ
ウ。

「うっ……。に、兄ちゃん達……。次回、絶対に助けに来てね……」

第三話「新しい仲間・そして、明日の為の涙」(後書き)

一姫は闘いの中とはいえ、遂に人を殺めてしまいました。

しかし彼女はその事を後悔する事はしません、それは同じ様に闘いにおいて敵を殺して行く華琳達や自分が殺してしまった相手に対する侮辱だと考えているからです。

近い内に一姫の詳しい設定などを公開しますね。

さて、次回は拠点ルート。あのシーンが出ます。

サービス、サービスウ♪

第四話「華琳達の日常・そして、病（や）みしモノの降臨」（前書き）

書き直し位にどれだけ時間をかけてるんだか……

とりあえず、四話目です。

第四話「華琳達の日常・そして、病（や）みしモノの降臨」

盗賊討伐に出た私達は途中で許緒という少女に出会った

彼女は自分の村を盗賊に襲われ一人で闘っていた

私達は彼女、季衣を仲間に加えて奴らの拠点に攻め込んだ

その闘いの中で私は初めて人を殺めた

覚悟はしていたがやはり辛かった

そんな私をさやちゃんは救ってくれた

この娘を、いえこの大陸の人達を助けるために私は戦う

さやちゃんの膝で泣きながら改めて誓った

真・恋姫＋無双一姫伝・魏

第四話「華琳達の日常・そして……病^やみしモノの降臨」

春蘭・秋蘭

ある日、城の庭でお茶をしていたら突然春蘭が聞いて来た。

「北郷、前から聞こうと思ってたんだが何故お前の槍は刃を隠しているのだ？」

「こ、これ……え〜とね…これは北郷家に代々伝わっている槍で、お婆ちゃんに貰った時にはすでに封印されていたんだ。お婆ちゃんが言っには時が来れば刃は自然に解き放たれるらしいんだけど」

一度だけ見た事があるお婆ちゃんが振るう槍の白刃は吸い込まれそうなほどに煌めいていた。

でも、私がお婆ちゃんから譲り受けた時にはその白刃は鉛で封印されていた。

『お婆ちゃん、何で刃を封印なんかするの？』

『お前の技量を試す為だよ。その封印を自分自身の力で解き放つ、それが出来る者こそがその“すざくえんげつとう朱雀偃月刀”の正統なる後継者の証なのさ』

『ふ〜ん』

『まあ、お前なら心配はないさ』

そう言えばあの時、盗賊の頭を倒した時も槍は低く唸りを上げていた。

でもそれだけ、もっと頑張らないと。

「祖母殿は強いのか？」

「ええ、強いわよ。最初私に剣術を教えるか槍術を教えるかでお爺ちゃんとで決闘したらしいんだけど天下無双と呼ばれたお爺ちゃんがぜんぜん敵わなかったらしいし、時々私にこっそりと剣術を教えてくれるお爺ちゃんをそのたんびに病院送りにしてたわ」

「びょういん？」

「ああ、病院というのはね医者が集まっている所で病気になったり、怪我をした時にそこに行けば治療してくれる施設の事よ」

「医療所のようなものか」

「規模が違いわ、医療所のように小さい所もあるけど病気を専門に治す医者、怪我を専門に治す医者、それぞれ何人もいて次々に来る患者に対応してるの」

「なるほど、検討してみる価値はあるな」

「それよりも北郷、私と闘え!!」

「はあ、何よいきなり？」

「それほどの人物に手ほどきを受けたのならばお前もかなりの使い手なのだろう、だから私と闘え!!」

「何よ、その理屈」

「一姫あきらめろ、こうなった姉者は人の話は聞かん。素直に相手をしてやってくれ」

「よし話がついたな、さあ行くぞ!!」

「わかった、わかったから引つ張らないで」

「ははは、頑張れよ」

（しかし、嘘は吐いていないが肝心なところも話してはくれてないな。まあ華琳様の言うとおり信じて待つとするか）

ちなみに勝負は引き分け。

この後一姫は決着をつけようとする春蘭に何度も追いかけられることになる。

桂花・季衣

「はい、お待ちどうさま」

「わあ、美味しそう」

「感激です、お姉様の料理が食べられるなんて」

季衣が天の国の料理が食べたいと言って来たので久しぶりに作ってみた。

作ったのはミートスパゲティ、トマトからケチャップを作り麺はラーメン用のを固めに茹でて代用した。

「チュルチュル、うわあゝゝ、美味しゝゝい！凄く美味しいよ」

「本当です！何かこう巨大化してどこかのお城を壊したくなるような……」

「どういう例えよそれは……」

「おいしいよ！さや、おねえちゃんのおりょうり、だいすき！」

口をケチャップでべたべたにしてさやちゃんが笑いながら言う。

「ほら、そんなに汚して、上手に食べなさいって言ったでしょ」

私も笑いながらさやちゃんの口を綺麗に拭う。

「あつ……ジュルジュルッお姉様、私も汚れてしまいました」

「美味しかった？」

「うん、さや、おなかいっぱい」

「じゃあ、お散歩した後お昼寝しようか」

「はい。いこつ、おねえちゃん」

「ふう、美味しかった、ご馳走様！待ってよ姉ちゃん、ボクも行く」

「じゃあ、三人で行きましょう」

そうして三人は手をつないで食堂を後にした。

「……うつ、余計なことしなきゃよかった……」

口周りをケチャップでベトベトにした桂花を残して……

「なあ秋蘭、こういうのはたしか「桜、桜を覚える」というんじゃないかったか？」

「策士、策に溺れるだ、姉者」

「おお、それだ！しかしなかなか美味しいな北郷の料理は」

「ええ、さすがに私の嫁ね」

「うわあああーん！」

華琳（達）

今日は二日ぶりのお風呂、この時代ではお風呂も経費などの理由からそう簡単に沸かせないらしい。

「わーい！お風呂、お風呂」

「こらさやちゃん、さわいじゃだめよ。こっちにいらっしやい」

「はい」

まずはさやちゃんの背中を流す、そして頭を洗うのだがやはり子供

は頭を洗うのをいやがる。

「いやー、あわがめにはいるから、あたまあらうのきらいー！」

「だめよ、キチンと綺麗にしなきゃ病気になるわよ」

「やだ~~~~！」

さやちゃんが暴れるのでソレが風呂場に入って来たことに迂闊にも私は気付かなかった。

「そうね、キチンと綺麗にしなきゃダメね」

そう言つてソレは私の両肩に手を置いた。

「！？か、華琳、いつの間に…？」

「さあ、いつの間にかしら？フッフ」

「わたし、お風呂につかるー」

「こら、さやちゃん！」

「はいはい、今度は一姫が綺麗になる番よ」

「華琳様、お背中をお流します」

「じゃあ、私はお姉様を」

「えー、姉ちゃんはボクが洗いたいのに」

「一姫を最初に洗うのは華琳様だ、後は順番にしろ」

結局、皆入つて来たが最後に秋蘭がとんでもない事を言った。

「さすが秋蘭ね、分かっているってうれしいわ」

「し、秋蘭、貴女ねえ〜」

「しかし、こうでもしなければおさまりが付かんぞ」

「さあ、背中を流してあげるからそんな物お取りなさい」

「きやあっ！」

華琳はそう言うのと私の体からタオルをはぎ取った。

「さあ、今綺麗に……！！か、一姫、その背中への傷は……」

「お姉様……」

みんなは私の背中を見て言葉を失っている。

そう、私の背中には左肩から右腰にかけて三本の大きな爪痕がある。

「……これは修行中についた傷よ、熊を相手にした時にね」

「く、熊だと！？」

「元々凶暴な熊だったんだけど猟師達に追われていく内にどんどん傷を深めていって最後には右腕と左手の二本の指を失い、その頃には三本指と呼ばれていても手が付けられないとお婆ちゃんに退治の依頼が来たのよ」

「ま、まさかとは思うが祖母殿はその三本指とやらの相手に……」

「そう、私にさせたのよ。さすがにあの時は死ぬかと思ったわよ」

「ちなみにその熊は……？」

「もちろん美味しくいただいたわよ、当然でしょ？」

「だよね！熊って結構美味しいよね」

「……………」

あれ、どうしたんだろ？

華琳達、呆然としたような顔でこっちを見てるけど私何か変な事言っただけかな？

「とにかく一姫、洗ってあげるから大人しくしなさい」

「分かったわよ、そのかわり変なところ触らないでよ」

これ以上逆らっても無駄だろうから大人しくすることにした。

ゴシゴシ

「この傷はあなたの強さの証でもあるわ、そしてその強さは人々を守る事ができる。だから私はこの傷を醜いとは思わない、むしろ美しくさえあるわ」

「華琳、ありがとう」

私は素直にうれしかった、そんな風に言ってくれたのはお婆ちゃんについて二人目だったから。

ゴシゴシ…ハア

「ん？……」

ゴシゴシ…ハアハアハア

(……………)

ゴシゴシ…ハアハアハアハア

「か、華琳、あ、あのありがとう、もういいわよ？」

ゴシゴシゴシゴシ……ハアハアハアハアハアハア

(だめだ、は、早く逃げないと大変な事に……)

「さやちゃん、さあ、あがりましょう」

そう言って早く逃げようと立ち上がった時私は自分の迂闊さを死ぬほど後悔した。

華琳に背中を洗わせていた状態で立ち上がるという事はつまり……
今、華琳の目の前には私のお尻がある訳で……

「あ…あのう…か、華琳？……」

そして、華琳の何かが切れ、その音は風呂場に鳴り響いた

プツチー……ン！！

グワシッ

「ひゃわあっ」

ムニムニ

「わわわっや、やだっ」

ペロリッ

「きゃあああ……っ！！」

突然の事に私は前を隠していたタオルを落とした。

「まあ、お姉様の胸、大きすぎず小さくもなく、綺麗な御椀形」

ピクンッ

「オオキクナク？」

イイイイイ……

「ん？」

「あ、姉ちゃんツルツル」

ピクンピクン

イイイイイイイイ……

「ま、まさか……この音は……」

「何だ、北郷は生えてないのか？」

ピクピクピクピク

キイイイイイイイイ……

「まちがいない、これはあの時の……一姫の槍が放っていた鳴動……。鞘花！早く上るぞ、ここはすぐに地獄になる！華琳様、すみません！……」

二人が風呂場から出ようとした時、華琳はとどめの一言を口にした。

「まあ、しっとりつやつやで可愛いわ」

（華琳様……！……！）

そして一姫の切れてはいけない何かが切れ、その音は鳴り響いた……

ブツチイイイイイ……ンッ！！

ヒイイイイイイイイイイイイイ……ン

病姫、此处に降臨。

「アンタたち、カクゴハイイワネ？」

そのすさまじい殺気にようやく華琳は正気に戻ったが一足遅かった。

「あ、あれ？か、一姫……ちゃん……」

「も、ももも申し訳ありませんお姉様。お許し下さい!!」

「ごめんよー、姉ちゃんー！」

「何を怒ってるのだ生えてないくらいで？」

「
「
「
…終わった…
」
」
」

ちなみに秋蘭は逃走済み

「ジゴクニオチナサーイ！」

『ギャアアアアアアアー——！！』

その後一週間、華琳達は一姫に一切口を聞いてもらえず春蘭は一姫に剃りあげられて落ち込んでたという。

続く

《次回予告》

ついに動き出した黄巾党、奴らとの闘いのさなか、三人の少女達がやって来た。

「私達も戦列に加えて下さい」

「役に立つでー！」

「お願いなのー！」

激化する闘いの中でのこの出会いは何を導くのか。

次回第五話「乱世に羽ばたけ！朱雀と三羽の烏達！」

「見てくしないと泣いちゃうよ」

第四話「華琳達の日常・そして、病（や）みしモノの降臨」（後書き）

華琳達の平和な？日常でした。

トマトはこの時代の中国には無いとの事ですが、まあ、二次小説の中の事なのでアリと言う事にして置いて下さい。

次回からは再び闘いの日々が、三羽烏の登場です。

第五話「乱世に羽ばたけ！！朱雀と三羽の烏達」（前書き）

黄巾党編突入です。

まずは彼女達、三人が仲間になります。

第五話「乱世に羽ばたけ！！朱雀と三羽の烏達」

いくつかの闘いをかさねて私は客将から正式に武官として華琳に仕えることになった。

そして、警備隊隊長として街の治安維持・発展に天の知識を使うことになった。

みんなも協力してくれて、街はどんどん発展していった。

そんな中、とうとう奴らが動き出した、

そう、あの黄巾党が。

真・恋姫＋無双一姫伝・魏

第五話「乱世に羽ばたけ！！朱雀と三羽の烏達」

「はあああーっ！」

ドガアッ

「ウギヤアー！」

『ひ、ひいゝゝっ』『だ、駄目だ、逃げろゝゝ！』

「待て！逃がすかー！」

私は秋蘭と共に活発になつて来た盗賊達の討伐に陳留より南西にある街にやって来ていた。

逃げ出した盗賊達を兵達が追いかけようとするのを私は止めた。

「待つて、無理に追わなくてもいいわ。今は街の人達の治療と救助を優先して」

『はっ了解しました!』

「一姫」

「秋蘭、そっちはどう?」

「たいした手ごたえはない、少し不利になつただけで蜘蛛の子を散らすように逃げ出していった」

「そう、こつちも同じよ」

「それにしても、何なんだ奴らは。強さはともかく今までの盗賊共とは何かが違う」

そういつて秋蘭は奴らが残して行つた黄色い布を握りしめた。

「……黄巾党……」

「……黄巾党、そうか、天の知識というやつか」

「ええ、秋蘭は帰つて華琳にこの事を報告して。私はしばらく此処に残つて街の復興を手伝うわ」

「分かつた、気をつけるよ、いつ奴らが再び襲ってくるか分らんぞ。夏侯淵隊、これより帰還するぞ!」

「北郷隊はこのままこの街に留まり復興の支援をするわよ」

『了解です!』

秋蘭隊が引き揚げた後、街の長老達がやって来た。

「おお、御使い様、こんな我らの為にありがとうございます」

「いいのよ、私達は民のみんなを守るために闘っているんだから」

長老と話をしていると子供達が駆け寄って来た。

『御使いさま〜、遊んで〜！』

「これ、お前たち！」

「こらっ駄目でしょ、今街は大変なんだから」

『ごめんなさい……』

遊んでくれと迫って来る子供達を少しだけ怒って、凹んだところを見計らい。

「遊ぶのはお家のお手伝いが終わってからよ」

『！！は〜〜いつ』

ウィンクしながらそう言うと、子供達はたちまち笑顔になってそれぞれの家に帰って行った。

「さあ、私達もがんばらなきゃ！」

（御使い様、ありがとうございます）

そして、陳留へと帰還した秋蘭は華琳に報告する為に玉座の間へ来

ていた。

「黄巾党？」

「はい、一姫は例の黄色い布を持つ盗賊達の事をそう呼んでました」
「そうか、北郷は歴史とやらを知っているのだったな。さっそく北郷を呼び戻して相談をして……」

「その必要はないわ、私達の歴史が一姫の知っている歴史通りに行くとはかぎらない。ならばそんな不確かなもの何の役にも立たないわ。だから一姫も何も言わなかったのよ」

「はい、私もそう思います。しかし敵の名称は必要です、黄巾党という名はそのまま使うことにしたいと思いますか？」

「ええ、そうして頂戴。それから各地の状況は？」

「盗賊共の動きが活発になっています。そしてやはりそのすべてが黄巾をつけているそうです」

「ここまで組織化されているとなるともうまちがいないようね」

「はい、太平要術を使っているのは間違いないかと」

タタタタタタッ

そこに、秋蘭達と同様に盗賊の討伐に出ていた季衣が帰って来た。

「華琳様ー、ただいまー！」

「お帰りなさい季衣。守備は？」

「はい、それほど強い奴らじゃなかったんですけど今までの野盗より何だか闘いにくかったです」

「やっぱりね」

「ねえ秋蘭様、姉ちゃんは？」

「一姫は復興支援の為に街に残っているぞ」

「ちえっ、姉ちゃんのゴハン食べたかったのに」

「なら私が作ってあげるわよ」

「えっ、ホント華琳様？わーい！」

「調子のいい奴だ」

「ふふふ、（無理をしちゃ駄目よ一姫）」

南西の街へ

「北郷隊長、ご報告が…」

「…義勇軍？」

仕事の手伝いしていると街の防衛を手伝いたいという義勇軍がいると報告があった。

「はっ、何でも黄巾の奴らに滅ぼされた街の生き残りが結集して義勇軍を作ったと」

「そう、なら話をしてみるわ。率いてる人を連れて来て」
「了解しました」

しばらくすると三人の女性を連れて戻って来た。

「貴女達が義勇軍を率いているの？」

「はっ！私は樂進と申します」

「ウチは李典といいますが、よろしゅうたのんます」

「私は干禁なの、よろしくなの」

「こらお前達！少し馴れ馴れし過ぎるぞ！」

「いいのよそれくらい、私は北郷。詳しく話を聞かせて」

「はい、私達は村の皆が作った籠を売るためにほかの街に巡業に出てたんです。なんとか売り切ることができて村に帰ってみると……くうっ!!」

彼女はそこまで言うのと悔しそうに拳を握りしめていた。

「村はメチャクチャに荒らされていて何人かが辛うじて生きていたくらいなの」

「せつかくガキ達に旨いもん買ってきて来たったてゆつのに……くそうっ!」

その光景を思い出しているのだろう、三人の瞳からは止めどなく涙が溢れていた。

「私達は復讐を誓いました、そして我々と同じように村を滅ぼされた人達を集め義勇軍を作ったのです。しかし所詮我々は素人、武器や食料の補給もままならず、そんな時にあなた方の噂を聞き、駆け付けたしだいです」

「カッコ悪いけど正直どうにもならんねん」

「だからお願いです、我々を戦列の端でもいいからお加え下さい!」
「できる限りのお役には立ちます」

「お願いなの」

「……わかったわ、じゃあ力を貸して」

「あ、ありがとうございます!!」

「隊長、よろしいので?」

「ええ、そのかわりとりあえずはこの街でだけになるわよ。私には正式に軍に加えるだけの権限はないから。それでいいかしら?」

「はいっ!今はそれだけでも十分です」

「隊長、一応曹操様にお伺いをたててからの方がよろしいのでは?」

「たぶんそんな時間はないわ。黄巾党はおそらくまだこの街を諦めていない、今は味方は多いいほどいいわ」

「わかりました。ではいつ戦闘になってもいいように食事をさせておきます」

「えろっすんません」

「その代りあまり多くは分けられんぞ、我らの糧食も十分とは言えんのだからな」

「大丈夫なの、皆もその辺は理解してるから文句はいわないの」

そう言いながら彼女達は兵士に連れられて行ったが、楽進と名のつた女性だけは残り私に話しかけて来た。

「あの、御使い様……」

「その御使い様というのは止めてほしいんだけど。そうね、一応私の部下ということになるから隊長とでも呼んで」

「わかりました隊長。では私の真名をお預けしますので私の事は風とお呼び下さい」

「ええ、よろしくね風」

その頃一姫達のいる街へ迫る砂塵があつた。

陳留

「曹操様、ご報告いたします！」

「どうした!?」

「はっ！南西の街に例の黄色の布を纏った暴徒が襲いかかって来た

とたった今連絡が」

「何！南西の街といえば一姫が残っている場所だぞ！」

「！！！！」

「北郷は無事なのか？」

「はっ、報告によれば直前に義勇軍を一時的に部隊に組み込んでいた為になんとか援軍の到着までは持ちこたえられそうとの事です」

「桂花、すぐに動かせる兵力はどの位？」

「はい、北西に向かわせようとしていた部隊ならすぐに動かせます」

「ならすぐに出るわよ、季衣と春蘭は一緒に来て頂戴！」

「御意！」

「はいっ！姉ちゃんを傷つけようとする奴らなんかボクがギタギタにしてやります！」

士気を高める華琳達に桂花は申し訳なさそうに話かけて来る。

「華琳様……」

「気持ちわかるけど連れてはいけないわよ桂花。貴方は残った兵力で北西に向かわせる部隊を再編成して頂戴。心配しなくても一姫は無事に連れ帰るわよ」

「はっ、こちらの事はお任せ下さい」

「華琳様、お氣をつけて」

「出陣する！！」

南西の街へ

ワアアアアアアッ

ガキイイインッ　ザシユッ　ドガアアアッ

黄巾党が攻めて来る中、私達は街の住民を守りながら闘っていた。

「街の人達は無事？」

「はっ！街の中心部に集めて兵達が守っています」

「そう、なら此処は何としても守り切らなきゃね、まだあの子達とも遊んであげてないんだから」

風と共に闘う中、下品な笑い声を上げながら黄巾党の兵士が近づいて来る。

「へへへ、殺せ殺せー、お？いい女じゃねえか。俺様が可愛がつてやるぜ」

「待てよ、髪の毛長い方は俺がいただくぜ！」

「くっ！とことん腐った連中ね」

「同感です、こんな奴らさっさと駆除してしましましょう！」

「おいおい、駆除だつてよ」

「冗談にしちゃ笑えねえぞゴルアッ！」

「冗談……フッ冗談なんか言った覚えはないぞ！」

ドガアッ

「グボハアッ」

風の蹴り一発で男は遙か後方に吹き飛んだ。

「な、何だと……？」

それを黄巾の男達は啞然として見ていた。

「ちょっと聞きたいんだけど、貴方達だってもともと朝廷に不満を持っていた農民だったんでしょ、なのになんで同じ境遇の人達を襲ったりするの？」

「だからよ！どうせあくせく働いたって殆ど朝廷に持っていかれるんだ、だったら代わりに俺達が貰ってやって何が悪い？」

ギリリリ……

私は身勝手な奴らへの怒りに歯を噛み締めた。

キイイイイイン

槍が私の怒りに反応して唸り上げる。

「やっぱり風の言うとおり駆除するしかないようね！」

そう言いながら風と一緒に黄巾の兵士達に畳み掛ける。

「ウギヤアアッ」

「うっう、か、数ではこっちが勝ってるんだ、一気にかかれー！」

襲い掛かって来る黄巾党を睨みつけながら風に話しかける。

「風、背中は預けたわよ。ついでに一姫の名も預けるわ」

「は、はいっ！光栄です。信頼に答えて見せます一姫様！」

「いくわよ、覚悟しなさい！」

「一人たりとも生かしては帰さん！」

『はああああー！ー！ー！ー！』

「沙和、そっちはどうや？」

「うん、ケガ人の治療は終わったの〜」

「よっしゃ、陸馬、此処はたのんだで。ウチらは風と隊長の援護に向かうさかい」

「ああ、ここは任せろ！」

「行くで、沙和！」

「わかったの、真桜ちゃん」

黄巾の兵士達は次々と襲い掛かって来るが私と風はそんな彼等をあしらって行く。

『ギャアアアーツ』

「くそっ！相手はたったの二人なんだぞ、何で倒せない？」

「フン！簡単な事だ、お前たちの数十人より私と一姫様の方が強いというだけだ」

「言わせておけば、周りを囲め！一気にかたをつけるぞ」

ザザザザザザッ

「ちょっときつくなってきたかな？」

「大丈夫です、もうそろそろ来る頃です」

ドガアアアアッ　　ザシユッザシユッ

「な、何だ？ギヤアアアーッ」

「凧ちゃん、隊長、助けに来たの」

「おまっとうさん」

「遅いぞ二人とも」

「まあまあ、凧。助かるわ二人とも」

「なんや凧、何自分一人だけ真名を預けとんねん。隊長、ウチは真桜や」

「私は沙和なの」

「ありがとう、真桜・沙和、行くわよ」

「了解や」

「はいなの」

「く、くそおおっ！」

「貴様ら、何を手こずっておる！」

「張梁様」

「こんな小娘共相手にだらしないぞ！」

「張梁？そう、張三兄弟の一人ね」

「ほう？俺達の事に詳しくそうだな。話してもらおうか、閨でな。グワハハハハハッ」

（こんな、こんなクズ達のせいでみんなが、何の罪もない人達が…）

キイイイイイイイイイイイン

ピシッ

朱雀^{すざくえんげつ}偃月刀が高く唸りを上げたかと思うと刃を封じている鉛の部分に一筋の亀裂が入った。

「な…一姫様、この気の高まりは一体」

「はははは、そんなナマクラ一撃でぶち壊してくれるわ。ドオリヤアーーー！」

ガキイイインッ

張梁が振り下ろして来る大刀を私は片手で持った槍で受け止める、こんな魂のこもっていない斬撃なんか今の私には欠片も通用しない。

「…な…何だと…？片手で俺様の一撃を…そんなバカな……………」

「あんた程度の力なんてこの程度という事よ」

そう言つて私は槍を「軽く」振り上げた。

シュバアッ

「…えっ？……………」

「なっ！！」

刃を封じているにも関わらず張梁の右腕は根元からきれいに「切断」され、腕からは血が噴き出して行く。

ブシュウーーッ

煙が晴れると其処には削り取られた地面だけが残っていて彼等の死体は欠片さえも残ってはいなかった。

「な、なんやこの威力は……」

「信じられないの……」

その後当直した華琳達の援軍によって黄巾の残党は一掃された。

「…凄まじいわね……」

華琳が感想を述べたのはあの合体攻撃の跡。正直自分でも信じられない。

「こ、これを本当に北郷が……？」

「姉ちゃん凄ーい」

「別に私だけの力ってわけじゃないわよ、凧」

私が凧達を呼ぶと凧、真桜、沙和、の三人は華琳の前に膝まつき、臣下の礼をとる。

「はっ、曹操様、私は樂進と申します。」

「ウチは李典といいます」

「私は干禁といいますの」

「彼女達が報告にあつた義勇軍？」

「ええ、勝手に部隊に組み込んだじゃったけど」

「安心なさい、別に責めたりしないから。貴女の判断は間違つてないわよ、それに武力も確かなようだしね。三人とも、正式に私に仕える気はあるかしら？」

「え…は、はいっ 勿論あります！」

「嬉しいの、誠心誠意お仕えするの」

「あゝ、でもウチらだけってゆうのも…」

「勿論、貴女達が率いていた義勇軍も軍に組み込むわよ。これから黄巾党との闘いは激しくなる、有能な兵士は多い方がいいからね」
「みんな、よろしくね！ボクの事は季衣でいいよ、それから姉ちゃんを助けてくれてありがとう」

「心強い仲間が出来て何よりだ。私の事は春蘭と呼んでくれ」

「はい、私の事は凧と呼んで下さい」

「ウチは真桜です」

「私は沙和なの」

「みんな真名の交換は済んだ様ね。では私の真名も預けます、これからは華林と呼びなさい」

「はっ！これより我ら三人、華琳様に永遠の忠誠を誓います」

「頼りにしてるわよ」

華琳達が真名の交換をしている時、街の陰から彼女達を見つめる眼があった。

「…噂だけでは信じられなかったけど……やっぱり貴女だったのね。
……一姫……」

続く

《次回予告》

季衣のお友達？

料理が得意な元気な娘なの、会えるのが楽しみね。

でも、もう来る頃なのに何処にもいないって。大丈夫なの？

「何処にいたんだよー！」

「貴方の地図が下手なのよー！」

そして文官志願の女性がやって来た。

そんな…あの人って……

次回・第六話「新しい妹と母の面影」

「これからよろしく、兄様達！」

「あゝ！ボクの出番！！！」

第五話「乱世に羽ばたけ！！朱雀と三羽の烏達」(後書き)

すみません、戦闘描写苦手なんです。

鳳との合体技はこれが最初で最後ですが(多分)。

一応「朱雀・烈風刃波・白虎^{ひゃっこ}」と言う名前が付いています。

第六話「新しい妹と、母の面影」

遂に動き出した黄巾党。

街を守りながら闘っている私達の所に戦列に加えてほしいとやって来た風達義勇軍。

彼女達の力添えもあって、なんとか奴らを退けた。

でも、まだ黄巾党との闘いは始まったばかり。

そんな私達を見つめる眼があったことを私は気付かなかった。

真・恋姫？無双一姫伝・魏

第六話「新しい妹と、母の面影」

「あーあ、流琉ってば早く来ないかなー」

中庭でお茶を飲んでいると季衣がそう呟いた。

「友達？」

「うん、安全な土地が広がったからボクの村まで手紙が届けられるようになったんだ。だから、ボクの友達にもお城においでって手紙を出したんだけど全然連絡がないんだ」

「それは心配ね。で、どんな友達なの？」

「典韋といってね、姉ちゃんみたいに作った料理がすごく美味しいんだ」

「そうなんだ。私も早く会ってみたいわね」

「うん。流琉も姉ちゃんとならすぐに仲良くなれるよ!」

「うふふ、楽しみね」

季衣とそんな話をしていると兵士の一人が報告の為に走って来た。

「失礼します!北郷隊長、許緒様、曹操様がお呼びです。すぐに玉座の間までお越し下さい」

「華琳が?分かったわ、季衣、急ぎましょう」

「うん!」

「おまたせ、何かあったの……というか……」

「……………」

「…何があったの?」

玉座の間に来ると黄巾党の討伐に出ていたはずの春蘭が華琳の玉座の前で正座をしていて酷く落ち込んでいた。

「いやな、黄巾の追撃をしていたのはいいんだが…その際に姉者が奴らの策にはまり袁術の領地に入り込んでしまったらしい」

「はあ?」

「其処に出て来たのが袁術の客将の孫策でな、うまく話を付け協力

して黄巾共を仕留めたのはいいのだが……」

「孫策に借りを作ったという訳ね」

「そう言う事だ」

「……はあ……」

「……華琳様、申し訳ありませんでした」

「まあいいわ、ここでもいつまでも責めていてもしょうがないわね。
何時かこの借りは返せる時が来るでしょう。その時は貴女が責任を
持って返すのよ」

「はい！この命に代えて」

「それで私達に何の用事なの？」

「先ほど戻って来た斥候が持ってきた情報によると、南東にある陳
煉という村を黄巾が狙っているらしいの。一姫は北郷隊を引き連れ
て黄巾討伐に向かつて頂戴」

「華琳様、ボクは？」

「季衣には西南に行つてほしいの。お願いできる？」

「解りました！黄巾党なんかギツタンギツタンにやつつけてやりま
す」

「なら、すぐに出るわね」

「姉ちゃん、気を付けてね」

「貴女もね、季衣」

「華琳様、我々は？」

「ウチらかて北郷隊やで」

凧達は自分達も一姫に付いて行きたいと言うが、華琳はそれを許さ

なかった。

「貴女達は軍に組み込んだ兵達と一緒に調練の仕上げよ。たしかに形にはなってきたけどまだまだ自分たちの物にはなっていないわ。ここで調練をおろそかにすると最後に命を落とすのは貴方達なんですからね」

「はい、分かりました」

「しかたないのー」

「ほな、がんばりまっか」

「あつ！おねえちゃん」

そして私は支度をする為に部屋に戻ると、絵本を読んでいたさやちゃんに私が私に気付いて抱き付いて来た。

「さやちゃん、私はこれから悪い奴らをやっつけに行かなくちゃならないから一人でお留守番できる？」

「えー、おねえちゃんいつちゃうの？うー、わかった。さや、いいだからおるすばんしてる。だからはやくかえってきてね」

「ええ、できるだけ早く帰って来るわね」

そう言つて私はさやちゃんを抱きしめて頭を撫でてあげた。

「えへへ」おねえちゃんいいにおい」

それから数日立ち、陳煉へと向かい進軍していると、偵察に向かわせていた兵士が慌てふためいて報告に来た。

「報告！北郷様、黄巾党はすでに陳煉への攻撃を始めています」

「なんですって！少し遅かったようね。なら急ぎましょう。全員、全速力で進軍！愚かな黄巾共を駆逐するわよ」

『応！』

街に辿り着くとすぐに黄巾党への攻撃を始める。
黄巾党達もまさかこんなに早く援軍が来るとは思っていなかったのか、反撃が遅れる。

「はああああー！ー！ー！」

ドガアー！ー！ー！

「ぐわあー！ー！ー！」

「深追いはしないで、街の人達を助けるのが優先よ！」

『はっ！』

ドゴオオオーーーーン！

「何？今の音は」

「はあああーーーーっ！」

ドガアアーーーーッ！

「ぐわあーーーーっ」

「さつさと街から出て行きなさい！さもないと本気でやっつけちゃうよー！」

「く、くそう！」

「何なのあの娘、あんなに小さいのにあの強さ。まるで季衣みたい。それにあの武器……ヨーヨー？」

「いくら強かろうが相手は一人なんだ、全員でかかれば……」

「かかれば、何？」

「何だ？おま……ぐはあっ！」

バキッ

女の子に襲い掛かろうとしていた賊は槍の一閃で吹き飛ぶ。

「えっ？あ、あの貴女は？」

「大丈夫、私達は味方よ。陳留からこの街を守りにきたの、それよりこいつ等に説得は無駄よ、堕ちる所まで堕ちた相手にかけてやる情けはないわ」

「は、はいっ」

「隊長！街の住民の安全は確保しました」

「そう、なら最後の仕上げにこいつ等の大掃除よ」

『応！』

「ひいひいーっ」

黄巾党を殲滅した後、私はあの女の子と一緒に街の人達の為に炊き出しをしていた。

「随分と手際がいいわね」

「ええ、何しろ幼馴染の子が大食らいなもので沢山の料理をするのは慣れているんです。そう言う貴女もかなりの腕ですね」

「まあね、今うちの軍に居る子もかなりの大食らいだからね。許緒という子なんだけど……」

「許緒！？も、もしかして鉄球をもった小柄な子ですか？」

「え、ええ、季衣を知っているの？」

「はい、私は季衣に呼ばれて来たんですけど何処にもいなくてこの街の食堂で仕事をさせてもらいながら探していたんです」

「じゃあ、貴女が典韋という子なの？」

「はい、貴女は季衣とどういう関係なんですか？」

「私は陳留の刺士の曹孟徳に仕えている北郷よ、季衣も一緒に仕えているわ。貴女の事を陳留に呼んだって言ってたけど」

「えっ？で、でもこの手紙には陳煉に居るって書いてあるのに……はあっ、たぶん書き間違えたんでしょう、昔からこんな単純な間違いをする子でしたから」

「あはは…季衣らしいわね、なら私達と一緒に行きましょう。貴女ほどの武があるなら華琳…曹操様も認めてくれるわよ」

「はいっ、お願いします北郷様。私の名は典韋、真名は流琉といいます」

「ええ、季衣も待っているわよ。それと私の真名は一姫よ、これからよろしくね」

こうして陳煉での黄巾党討伐を終えた私達は流琉を連れて陳留へと帰還した。

華琳への報告と流琉を紹介するために玉座の間へと入るとそこには同じく華琳への報告をしていた季衣がいた。

「あつ、姉ちゃんお帰りなさい……あーっ！流琉、今まで何処にいたんだよー！」

「何処にいたも何も…貴女、手紙に陳留と陳煉を間違えて書いてたでしょう！おかげで私はずーっ！と陳煉で貴女を探していたのよ！」

「お城で働いているって書いてたじゃないか、だからお城がある陳留に来ればよかつたじゃないか」

「何勝手なこと言ってるのよ！もうお料理作ってあげない！」

「何おー！そんな事は許さないぞー！」

ギャーギャー！

「……何事なの一姫？」

再会した途端にケン力を始めた典章と季衣を呆然と見ながら華琳が聞いて来る。

「陳煉で黄巾討伐を手伝ってくれた娘で典章という名前よ。季衣の幼馴染でほんとは此処に呼んだはずなんだけどどうやら手紙に街の名前を書き間違えてたらしくて……。でもその武力は確かよ、華琳に紹介しようと思って連れて来たの」

「そう、一姫がそう言うのなら間違いは無いわね。其処の貴女、典章と言うそうね」

「えっ、は、はいっ！私は典韋と言います」

「一姫に聞いたけどかなりの武があるそうね、その武力私の為に使う気はあるかしら？」

「はい！曹操様の事は噂でよく聞いてます。民の事を親身になって考えて下さると。曹操様の為なら一生懸命に仕えさせていただきます。私の真名は流琉と申します、よろしく願います」

「分かったわ、季衣同様に貴女の事も頼りにさせてもらっわ。では私の真名も預けます。これからは華琳とお呼びなさい、皆も真名を預けなさい」

「私の真名は春蘭だ、これからよろしく頼む」

「私の真名は秋蘭という、頼りにさせてもらっぞ」

「私の真名は桂花よ、お姉様が認めたのなら私も認めるわ」

「私の真名は風だ、共に華琳様と一姫様の力となろう」

「ウチは真桜や、よろしゅうにな」

「私は沙和なのー、よろしくなのー」

「ボクは季衣だよー、よろ…「ポカツ」痛っ！」

「貴女はいいでしょ」

「うっー、痛いよ姉ちゃん…」

『はははははははははは』

「あ、あのー、一姫様、わ、私も貴女の事を姉様とお呼びしても宜しいでしょうか？」

「ええ、いいわよ。私も妹が増えて嬉しいわ」

「じゃ、じゃあ、姉様…／＼／＼／＼」

「あー！流琉ってば真っ赤になってる」

「こらー！季衣ー！」

「失礼します、曹操様！」

「何事か」

「はっ、今城の前に文官志願という者が来ていまして……」

「愚か者！そのような怪しい奴さっさと追い返してしまえ！」

「そ、それが、朝廷よりの紹介状を持ってまして……」

「なら会わない訳にはいかないわね。分かりました、此处に通しなさい」

「御意！」

「華琳様、どう思われます？」

「面白いじゃない、たとえ間諜だったとしても私の霸道は止められないわよ、逆に取り込むのもいいかもね」

そうしていると、兵士に連れられて一人の女性がやって来た。

「……」

「曹操様、いきなりやって来たにも関わらずのお目通り、ありがとうございます」

「いいのよ、さて文官志願との事だけどどれだけの实力があるのかゆっくり見せてもらうわよ。力不足と見たらすぐに出て行ってもら事になるけどいいかしら？」

「はっ、曹操様の期待を裏切らぬように全力をもって答えてみせます」

「……………」

「姉ちゃん、どうしたの？」

「姉様？」

「一姫？」

私はその女性を見て言葉を失った……

何故ならば……

「お母さん……………」

続く

《次回予告》

新たなる仲間も加わり私達は遂に黄巾党との決戦に挑む。

そんな時ある義勇軍と共闘することになった。

そう、彼女たちこそ……

「皆で力を合わせて黄巾党なんてやっつけちゃいましょう」

「我が正義の刃の前に敵はいない」

「鈴々に任せるのだー！」

「はわわ……」

「あわわ……」

そしてあの女性むすめは……

「私の智、見せてごらんにいれます」

次回・第七話「滅びゆく者ともう一人の王」

貴女の進む道は……

「次回も……はい、お饅頭」わーい！」「次回も見てくださいね」

第七話「滅びゆく者と、もう一人の王」（前書き）

遂に始まる黄巾党との決戦。

ですが、文才の無い私は戦闘描写が苦手です……。

第七話「滅びゆく者と、もう一人の王」

街を襲っていた黄巾党を倒し私達は

新しい仲間と共に城に帰って来た。

華琳に仕える事になった流瑠、

そして、文官志願の女性がやって来た。

でも、その人は……その人は……

真・恋姫？無双一姫伝・魏

第七話「滅びゆく者ともう一人の王」

「はああーっ！」

ブンッブンッ

私は中庭で朝の鍛練をしていた。

其処にやって来たのはこの前華琳に士官して来た司馬芝さんだった。

「精が出ますね」

「司馬芝さん」

「あら、白花^{はくか}という真名は預けた筈ですが？」
「あ、御免なさい。おはようございます、白花さん」
「華琳様がお呼びですよ、玉座の間に全員集まるようにとの事です」
「分かりました、すぐに行きます」

私は訓練用の槍を置いて歩き出した。

「あの、一姫さん」

「はい、何でしょうか？」

「そんなに堅苦しい話し方ではなくもう少し気楽に話してもらえませんか」

「で、でも、何と言うか…」

（お母さんにそっくりだからとは言いづらいし）

そんな私に白花さんは軽く笑って言った。

「では、私も分をわきまえて御遣い様とお呼びしますね」

「わ、分かったわよ、行きましょ白花さん」

「はい、一姫さん。くすくす」

（何か調子が狂うな）

私達が玉座の間に入るとすでに皆が集まっていた。

「遅れて御免なさい。それで何かあったの？」

「二人とも来たわね、実は風が黄巾党の拠点の情報を手に入れて来たのよ」

「へえ、お手柄じゃない風」

「い、いえ、たまたまですよ」

「では、遂に」

「ええ、これ以上奴らをのさばらせておく気はないわ。決戦よ」

『御意!』

黄巾党の拠点を攻めるために軍を進めていると同じく黄巾党と闘っているという義勇軍を見つけた。
その義勇軍を率いているという人物の名を聞いて驚いた、何しろあの「劉備」なのだから。

「貴女がこの義勇軍を率いているのね」

「はい、私は劉備、字を玄德といいます」

「私は関羽、字は雲長です」

「鈴々は張飛、字は翼徳なのだ」

「はわわ、わ、私は諸葛亮、字を孔明といいましゅ」

「あわわ、わ、私は鳳統、字を士元といいましゅ」

(…もう大抵の事では驚かないつもりだったけどこの時点で蜀の大軍師が陣営に加わってるなんて…私の知識もあまり役には立ちそうにもないわね)

「私は曹操、字は孟徳。この軍を率いる者よ」

「私は夏侯惇、字は玄讓。華琳様一の忠臣だ」

「私は夏侯淵、字は妙才だ」

「私は荀^{じゅんい}?、字は文若よ」

「私は司馬芝、字は子華です」
「私は北郷よ。字はないわ」

私の名を聞くと彼女達の顔色が変わった。

「あ、貴女が噂の天の御遣い様なんですか？」

「ええ、そうだけど」

「会えて光栄です！！うわ~~~~どうしよう、ドキドキして来ちゃったよ。ね、愛紗ちゃん」

「は、はい。桃香様……（この方が……何故桃香様ではなく曹操殿の所に……）」

私達が話し合いをしていると真桜が慌てて駆け寄って来た。

「隊長、大変や！」

「あら、どうしたの真桜？」

「そ、それが、あの〜」

「？」

私が首をかしげていると風が一人の女の子を連れてきた。
此処に居る筈の無い、さやちゃんを。

「さ、さやちゃん？何でさやちゃんが？」

「どうやら荷物の中に紛れ込んでいたようです」

さやちゃんは申し訳なさそうな顔をして呟いた。

「あ、あのね、さや、さびしかったからついてきちゃったの。おね

えちゃんといっしょにいたかったから……」

そんなさやちゃんに私は…

「馬鹿ッ!!」

ビクッ

いきなり怒鳴られるとは思ってなかったのかさやちゃんはただ呆然としていた。

「こんな所に着いて来るなんて何を考えてるの! 此处は貴女が来るような所じゃないのよ!」

「か、一姫様、もう少し優しく言われては…」

「貴女は黙ってなさい!!」

「は、はっ、申し訳ありません」

そう言つて風は沙和達の所まで下がっていった。

「うひゃゝ、隊長マジで怒ってるで」

「あんなに怖い隊長初めて見たのー」

「それだけ鞘花ちゃんを心配なさってるのだろっ」

「…っ、っ、ぐすっ、ひっく」

さやちゃんはぐずりながら目から涙をぽろぽろ零していた。

「此処はね、人と人が闘う所なの。…人が…死んでいく所なのよ…… 忘れたわけじゃないでしょ、貴女のお母さんが殺された事を」
「……か、かかさま……」

さやちゃんにお母さんの事を思い出させる事は身を切るように辛いけど伝えなければいけない。分かってくれると信じて。

(……一姫……)

「貴女のお母さんのような人を一人でも無くすために私達は闘ってるの、その為には私達が敵と闘わなければならない…… 敵を、この手で…… 殺さなければならぬ……」

「ひつく、ひつく」

「でもさやちゃんにはそんな人が死んでいく所を見せたくない、人を…… 殺す所を…… 見られたくないの……」

「お、おねえ…… ちゃん……」

何時の間にか私の目からも涙が零れていた。

「お願いよ…… こんな無茶は、しないでよ…… こんな所でさやちゃんが傷ついたりしたら…… 私、私は……」

「ご、ごめんなさい…… ひつく、ごめんなさい…… うわああー！ーん、あ、あやまるからあ、きらいにならないでえ…… き、きらいになっちゃだあー！ー、うえええー！ーん」

泣き出したさやちゃんを私は優しく抱きしめ、頭を優しく撫でてあげた。

「馬鹿ね、嫌いになるわけじゃない。私はさやちゃんが大好きよ、大好きだから怒ったのよ」

「えーん、えーん」

鞘花も一姫に抱きついて泣きじゃくっている。

華琳と桂花に白花はそんな二人をじっと見ていた。

「華琳様、どうなされますか？」

「一姫には悪いけど鞘花一人を送るために割く兵はいないわ。このまま連れて行くしかないわね」

「そうですね、むしろここで帰すより一緒に連れていく方が安全かもしれません」

少し離れた場所で劉備達は事の成り行きを見ていたが、一姫が鞘花を怒っている所を見て張飛は何か納得できない様に？れていた。

「あんなに怒る事ないと思うのだ」

「それは違うぞ鈴々、大事な存在だからこそ怒る時には怒らねばならないのだ」

「そうだよね、でも大好きな人と一緒に居たいっていう気持ちも分かるかな」

そうして劉備達の義勇軍と合流した華琳達は黄巾党の拠点へと向かって行った。

「いい、絶対にこの天幕から出ちゃダメよ」
「うん、わかった」

鞘花を天幕に残して一姫は戦場へと向かう。

「うおおー！ー！」
「うりゃあー！ー！」
「はああー！ー！」

春蘭が敵の中に斬り込んで行き、季衣と流琉が周りを取り囲む敵を
尻はらって行く。

「ウチの螺旋は悪を砕く螺旋や！」
「貴様ら悪党が息をするなんて一億年早いのー！」
「この大陸の平和の為に貴様らには滅びてもらう！」

三羽鳥の連携に黄巾の兵達は太刀打ち出来ずに倒されていく。

「奴らを人と思うな、ただの動物的と思え！」

秋蘭は弓隊を率いて敵兵を射抜いていく。

そんな曹操軍の闘いを関羽達は見ていた。

「さすが噂に聞く曹操殿の軍、いくら我々が義勇軍とはいえ此処までの差があるとはな」

「なに弱気な事言ってるのだ！鈴々達だつて負けてられないのだ！」
「でもここまでやらなきゃいけないのかな？あの人達だつて…」

「あの人達だつて何？」

「え？…あ、御遣い様…」

「北郷殿」

「うにゃ？」

黄巾と闘いながら此処まで来たのだらう一姫は肩で息をしていた。
その槍はいまだ封印されたままだが封印している鉛の部分のひび割れは全体に広がっていた。

「もし、奴らに対して可哀想なんて感情を欠片でも持っているんなら今すぐ此処から居なくなつて！！」

「え……あ、あの」

「北郷殿！桃香様はそんな軽い気持ちでこの闘いに臨んでいる訳では」

「だつたら迷わないで！！私達が迷えばそれだけ救える人が減るのよ。気持ちわかるけど奴らが一人生き残れば罪のない人が十人死ぬ、そう考えて闘うしかない。少なくとも私はそうしているわ」

劉備は何も言えなくなった、一姫の瞳に目には見えない涙を見た気がしたから。

「じゃあ私は行くわよ」

そう言つて一姫は敵の本陣へと走つて行つた。

「あ、ずるい。みんな！鈴々達も行くのだ、突撃・粉碎・勝利なの

だー！」

『応オオオオー！！』

「・・・・・・」

「桃香様、貴女の優しさはとても尊いものです。貴女は間違っていない、ですが北郷殿も間違っていないのもまた事実です。だから桃香様は桃香様の信じる道を御歩きください、我々は何処までも桃香様について行きます。では私も行ってまいります」

劉備は戦場へと駆けていく関羽の背中を見ながら一姫の言葉を思い出していた。

『私達が迷えばそれだけ救える人が減る』

（分かってる、分かってるつもり。でもやっぱり……）

「はああー！！」

ドガアアッ！

「ギャアアー！！」

一姫は敵の真っ只中で闘っていた。そこには確かに以前のような迷いは無かった、そして迷いを捨てた時から一姫の闘い方は変わっていた。

「なんと無駄のない動きだ、まるで鳥が空を舞うように動いている」
そんな一姫の闘いを関羽はある種の憧れの様な目で見ていた。
其処に巨漢な男が走って来た。

『うおおおー！』

「何だ！」

「俺の弟を殺した御遣いとやらは何処だー！」

「あれは張三兄弟の一人か、おそらく張宝という奴だな」

そして関羽は張宝の前に立ちはだかった。

「待て！北郷殿はゴミ掃除で忙しいから、私が相手をしよう」

「貴様の様な小娘がこの張宝様の相手をするだと？身の程知らずめが！」

「身の程知らずはどちらか教えてやろう、代金は貴様の命だ！」

関羽に斬りかかる張宝だが武と心を併せ持つ関羽相手に力だけに頼る張宝が勝てるはずもなくあえなく敗北することになる。

「張三兄弟の一人張宝の首、劉備が家臣関羽が討ち取ったりー！」

『そ、そんな…張宝さまが』『強すぎる、勝てるわけがねえ』『張角様は、張角様は何処だー！』

「今まで散々好き勝手に暴れまわって来た貴様らだ。今更助けても
らえるとは思わぬ事だな、皆の者——！こ奴らを殺しつくせ——！」
『応オオオオ——！！』

『ギヤアアア——！！！！！！』 『張角様——！助けて——！！』

阿鼻叫喚の悲鳴の中、曹操軍の兵が黄巾の天幕の中に居た。いや、
兵の鎧を着けた男が。

「糞っ！役立たず共が。まあいい、これさえあればもう一度……」

「あら、早いわね。もうこんな所まで探索に来ているなんて、とこ
ろで張角は何処かしら？」

男が太平要術を持ち去ろうとしていると、華琳と桂花・白花の三人
が天幕に入って来た。

（なっ！こんな時に曹操だと、いや、いかに曹操といえども警護の
兵を連れずに女三人だけならばどうとでもなる） 「これは曹操様、
張角の姿は何処にも見えません。おそらくまだ戦場にいるかと。で
は私も戦線に戻ります」

そう言い、張角はこの場から逃げようとするが当然華琳の目を誤魔
化すことは出来なかった。

「そんな猿芝居がこの曹孟徳に通じると思っているのか！覚悟を決

める張角！」

「…覚悟を決めろだと、大人しく見逃せばよかったものを。手土産代わりにその首もらっ t……」

ザシユツ

言い終える前に張角の首は華琳が振るった「絶」によって胴体から切り離されていた。

ドサツ

地に落ちた張角の首を冷ややかに見降ろしながら白花と桂花は華琳に語りかける。

「最後まで愚かな男でしたね。ともかくこれで黄巾党も終わり、たとえ逃げ延びた兵が居たとしても今までのような統率は出来ないでしょう」

「ええ、太平要術のない奴らはただの野盗、駆逐するのに造作もありません」

「さあ、張角の首を持ってさっさとこんな所出ていくわよ」

『御意！』

「華琳——！」

「一姫、そっちは終わったの？」

「ええ、張角は？」

「それよ」

華琳はそう言いながら地面に転がしている包みを横目で見つめる。

「そう、これで黄巾の乱もようやく終わりね」

「そうね」

其処に血で赤く滲んだ包みを持っている関羽がやって来た。

「曹操殿、張角を打ち取られたそうですね」

「そういう貴女は？」

華琳は関羽の持っている包みを見ながら聞いた。

「はい、私も張宝を打ち取りました」

「愛紗のずるっこー！張宝は鈴々が討ち取る予定だったのだ！」

「な、ずるはないだろう、ずるは」

「あはは」

そして諸葛亮と鳳統はおどしながらも華琳に話かけて来る。

「あ、あの、曹操さん。その、太平要術は……」

「太平要術？白花」

「はい、此処に」

白花は数冊の本を取りだした。

「あわわ、これが太平要術……」

「白花、解るわね？」

「御意」

一礼すると白花は太平要術を燃え盛る火の中へと放り込んだ。

「はわー！な、何を…」

「何をと言われても奴らに利用され汚れきった書物など私には必要ないわ。それとも貴女達には必要だったのかしら？だったら悪い事をしたわね」

「い、いえ、しょんなことは…」

「じゃあ、私達は帰るわね。また何時か会う事もあるでしょう」

一姫は離れて行く華琳の後を追って行こうとしたが、その彼女を劉備が呼び止める。

「あ、あの、御遣い様」

「その御遣い様っていうのやめてくれない。なんか柄じゃないから」

「じゃあ、北郷様。不躰なお願いですけど私達の力になってはもらえませんか？」

「たしかに不躰ね。私は華琳に仕えてる身よ、軽々しく主を変えられると思う？」

「そ、そうですね、勝手な事を言つてすみません」

「しかし、何故北郷殿は曹操殿の下に？」

「最初に華琳に保護されたというのもあるけど今は私自身の意思で華琳の所に居るわ。もし私が本当の意味での天の御遣いだということなら天が選んだのは華琳ということになるわね」

「！！・・・」

「じゃあね」

そうして一姫は曹操軍の陣へと帰って行った。

『おねえちゃんーん』

『さやちゃん、お城に帰ったらお尻ペンペンだからね』

『え〜、やだー！』

『ダメよ、いい子で留守番する約束を破ったんだからね』

『う〜、かりんさま〜』

『あきらめなさい』

『え〜ん、え〜ん』

「桃香様…」

「大丈夫だよ…私、頑張るから」

「その意気なのだ、お姉ちゃんには鈴々達がついてるのだ！」

「はい、桃香様は私達がお支えます」

「わ、私達も頑張りますしゅ！」

「有り難う、皆」（北郷様、私は諦めません。必ず築いて見せます、私…いえ、私達の理想の世界を）

こうして黄巾の乱は終結した。そして一姫ともう一人の王との邂逅はこの乱世に何をもたらすのか？それは今は誰にも解らない。

続く

《次回予告》

黄巾の乱も収まり私達は新たに徴兵をする事になった。

「私に良い案があります」

「どんな案かしら？」

「ゴニョゴニョ」

「お姉さまが！素敵」

「いいわ、許可します」

「では彼女達を呼び寄せます。彼女達と合わせて四人なら」

次回・第八話「乱世に響く歌姫達の歌声に」

「ちょっと待つて、四人？」

「みんな見てねー！愛してるよー！」

第七話「滅びゆく者と、もう一人の王」（後書き）

今回の話を書くには黄巾党には完全に悪役になってもらわなくてはなりませんでした。なので、史実通りに張三兄弟に出演してもらいました。

まあ、「彼女達」には次回に出ていただきますけどね。

第八話「乱世に響く、歌姫達の歌声に」

黄巾党本隊との決戦の時、私は劉備との邂逅をはたした。

彼女の理想は素晴らしい、でも理想しか見ていない。

だから私は彼女とは歩めない。

たとえ辛くとも、苦しくても私は、

華琳と共に……

真・恋姫＋無双一姫伝・魏

第八話「乱世に響く歌姫達の歌声に」

華琳は黄巾党壊滅の功績を認められ西園八校尉の一人になった。

それに伴い、私と春蘭、秋蘭は華琳に曹操軍内での將軍位を受ける事になり、季衣と流琉はそれぞれ華琳の親衛隊隊長として、私は警備隊の隊長も兼任する事になった。

「おめでとうございます。一姫將軍」

「おめつとうさんや、將軍様」

「おめでとうなの、將軍様」

「……からかうのは止めてよ三人とも」

「はー、照れとるわ。可愛いなー隊長」

「ほっぺが真っ赤なのー」

「こらっ！二人ともいい加減にしないか」

凧が怒りかけたが私はそれより先に。

「二人とも呑気にしてるけど貴女達も副隊長に昇格してるんだからね。今までみたいなのほほんとしてられないわよ」

「げっ！そうやった」

「うっ、お休みの時間が減っちゃうの」

「二人ともっ！華琳様と一姫様の信頼を裏切る様なまねをしたら…」

…」

そう言う凧の右手に気がこもって行く。

「わーとる、わーとる。やから気を抑えてんか」

「凧ちゃん、どんどん怖くなっていくの」

一姫達がそんな会話を交わしている頃、玉座の間では。

「旅芸人？」

「はい、その旅芸人達を使って徴兵をしたいのですが」
「どう言う事？」

華琳、白花、桂花の三人で会議をしていた。

「その者達、三姉妹は歌と踊りで街を渡り歩いてかなりの人気を持っています。しかし、黄巾党が動きだした頃から活動を止めてしまったんです」

「それは何故？」

「彼女達の姓と名が偶然にも張三兄弟と同じだったからです。その

為彼女達は人前で活動する事が出来なくなったのです」

「なるほど、確かに奴らと同じ名前では活動なんて出来ないわね」

「で、その旅芸人達をどうするの？」

桂花の質問に白花は答える。

「はい、彼女達の歌は人々の心を引きつけます。ですから彼女達に徴兵を手伝ってもらう代わりに活動の援助と支援をすれば宜しいかと。名前の方は偽名か真名を名乗れば問題は無いでしょうし。そして……」

「そして、何？」

「一姫さんにも…ゴニョゴニョ」

華琳と桂花にそつと耳打ちする。

「許可します！！白花、さっそくその者達と交渉を進めなさい。絶対に了承を得て来るのよ」

「御意」

「あ、ああ、あああああ、お、お姉様が……お姉様の……」

ゾクウツ

さやちゃんや凧達とご飯を食べているといきなり背筋に悪寒が走った。

「ひっ…な、何？」

「おねえちゃん？」

「どうしたんですか一姫様？」

「何だか背筋に冷たい物が……誰か悪巧みでもしてるんじゃないでしょうね？……例えば華琳とか桂花とか華琳とか華琳とか、さらには桂花とか華琳とか……」

「……何と言うか、それはどうしようもないです」

「そうよね、どうしようもないのよね……はあ……」

「がんばってね、おねえちゃん」

さやちゃんは優しく私の背中をポンポンと叩いてくれる。

その優しさが、今は少しだけ痛い。……ぐすん。

数日後、少し離れた街で

白花は例の旅芸人達と話をしていた。

「本当っ！？本当にちい達の活動を支援してくれるの？」

「本当ですよ。代わりに徴兵の手伝いと名前を偽名にするか真名で名乗ってもらうかする事になりますが」

「それくらいなら全然平気よ。ねえ、天和姉さん」

「うん、思いつき歌えるんならお姉ちゃんは文句は無いよ」

「そうね、今の私達には破格の条件だね。司馬芝さんでしたね、その条件でお引き受けします」

「有り難うございます。ではこれから陳留へのご案内します。ぜひ、ご紹介したい人も居ますので」

こうして彼女達、数え役満しすたあずは華琳の元に集う事になった。

更に数日後……

玉座の間にて、

「貴女達が噂の旅芸人ね」

「はい、よろしく願います。曹操様」

三人は跪き、臣下の礼を取る。

そんな彼女達を一姫は華琳の横で見つめている。

（この娘達の衣装、どう見てもアイドル衣装よね。何故かしら？物
凄く嫌な予感がするのは）

「一姫さん、ちょっと此方へ来ていただけますか？」

「ええ、いいけど」

白花に呼ばれ、一姫は三姉妹の所に行く。

「この方が天の御遣い、北郷一姫さんですよ」

「うわゝゝ、噂どおりに綺麗で可愛い♪」

「……悔しいけど確かにちい達より綺麗ね」

三人の内メガネをかけた一人、人和は見定める様にブツブツ言いながら私の周りを回っている。

「容姿、身長、体形……申し分はないわね。白花さん、彼女なら問題は無いわ」

「あ、あの……な、何の話？」
「うふふ、それはね」

白花がパチンツと指を鳴らすと兵士達が布が掛けられた何かを持って来た。

その布が取り払われると其処には三姉妹と同じような衣装があった。

「は、白花さん……もしかして……コレ……」
「はい。一姫さんの衣装です」

一姫は逃げ出した。

しかし、華琳に回り込まれてしまった。

「知らなかったの？ 霸王からは逃げられないわよ」

「ちょ、ちょっと待ってよ。そんな恥ずかしい格好嫌よ」

「大丈夫、とってもお似合いですよ。さあ、試しに着替えてみましょう」

白花がそう言い、指をパチンツと鳴らすとガシリツと両手を秋蘭と春蘭に掴まれる。

「ちょっと、二人共……何をするの？」

「一姫には悪いがこれも華琳様のご命令だ」

「もたもたするな、急ぐぞ」

「嫌ー！！嫌よ、放して、はーなーしーてー！！」

いくら暴れても二人は放してはくれずに、そのまま扉の向こうへと

引きずられて行く。

＼ハーナーシーテ／

（春）（；。Д）（秋）＼ズルズル

＼イヤー／

＼一Д一＼ギイイイイ

＼アー／

＼一＼ガッシャアーンツ

……何処の木人形よ私は……

結局私はアイドル衣装に着替えさせられた。

確かに子供の頃に憧れた事はあったけど……何よこのミニスカートは。

髪は赤いリボンでツインテールに纏められてるし。

「か、可愛い……可愛いわ、一姫……一姫さん」

白花さんは真つ赤な顔で泣きながら私を見つめていた、鼻から何か赤い物が流れている気がするけど気がつかなかった事にした。

華琳と桂花はうつ伏せに倒れ伏し、赤い液体でダイイングメッセージを書き遺していた。

はんにんは……

「おねえちゃん、きれいきれい……!!」

何時の間にかやって来ていたさやちゃんは私の姿を見て大はしゃぎで絶賛する。

「わあ、一姬ちゃん綺麗」

「うう、く、悔しい」

「さあ、さっそく歌の練習を始めましょう」

「……分かったわよ、やります。やればいいんですよ」

「いいな、さやもこんなきれいなふくきてみたい」

さやちゃんが指を咥えて私の衣装を見てみると天和がさやちゃんを見つめながら言う。

「ねえ、人和ちゃん。この娘にも舞台を手伝ってもらおうよ」

「……そうね、こんなに可愛いんだから舞台に花を添えるには十分ね」

「ちいもさんせーいっ!!」

「ほんと、ほんと？さやもきれいなふくきれなの？」

「うんつ。お姉ちゃん達と一緒に頑張ろう」

「わーい、わーい!! さや、がんばるー」

さやちゃんは飛び跳ねてはしゃいでいる。

「おねえちゃん、いつしよにがんばろうね」

うっ、そんなにキラキラした期待の目で見ないでよ。断れないじゃない。

「そ、そうね。頑張ろうね……」

もはや逃げ場は無くなり、諦める以外の選択肢は存在しなかった。気絶していた筈の華琳と桂花の親指が立っていたので一週間ほど口を聞かない事にした。

そして、一月ほどたったある日。
遂にその時がやって来た。

『みんなー、げんきー！？』

『げんきー……っ！』

『今日は私達四人と小さなお友達のふぁーすと・こんさあとに来てくれてありがとーっ！』

『わあああああー……っ！』

『まだまだ戦乱は続き、平和な世の中は遠いけど……それでも私達は闘わなければいけません。それには皆の力が必要な、平和な国を創る為に、皆が心から笑える世の中にする為に……。皆っ！！力を合わせて頑張ろー……っ！』

『応おおおおおおお————っ!!』

天和の呼びかけに皆が声を上げて応える。

……解っている。彼等はいずれは戦争に赴き、闘い、そして……死んで行く者達も居るのだらう。

民達には最初に言っている。このコンサートはただ、楽しむ物ではなく徴兵も兼ねてであると。つまり、徴兵に応じ軍に入るという事は死と隣り合わせになるという事。

それでも彼等は応えてくれる、ならば私も彼らに応えよう。

『じゃあ、自己紹介ね。私は天和、真名だけど皆に預けちゃう』

『うおおおおおおお————っ!!』

『じゃあ、ちいの真名を預けてあげる。地和って呼んでね』

『うおおおおおおお————っ!!』

『当然、私の真名もよ。人和、よろしくね』

『うおおおおおおお————
————っ!!』

『私は一姫。コンサートの時だけ特別に預けてあ・げ・る』

そう言いながら軽くウインク。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおー
ーーーーっ!』

おお、予想を上回る大声援。やばい、ちょっと嬉しい。
其処にリボンを主体にした可愛いステージ衣装を着たさやちゃんが
ちょこちょこ歩いて来る。

『わたしは、さやかーっ!』

.....

一瞬の静寂の後、

『ほあああああああああああああああああー
ーーーーっ!』

一番の大声援だったのは気のせいだろうか？

「ハアハア、さやかタン……」

何？今の……

『じゃ、じゃあ……。コホン。「天の流星しすたあず」最初の一曲目、
聞いて下さい』

曲が流れだし観客達のボルテージも上がって来る。

闘いは続く、むしろ始まったばかり、終わりなどまだ全然見えない。

そして彼等はその闘いに身を投じて行く。

ならば私は歌おう、彼等の為に、民達の為に、明日への希望の歌を。

そして、レクイエム葬送曲を……………

続く。

次回予告

袁紹より発せられた激文？により遂に反董卓連合は結成された。
彼の地に集う諸侯達。

「貴女が噂の天の御遣い？いい眼をしてるわね」

「ふーん、妾達とあまり変わらぬのじゃな」

「あんたの噂は聞いてるぜ」

「桃香が世話になったらいいな」

「お久しぶりです、北郷様」

そして……

「姉者——っ!!」

闘いというのは綺麗事じゃ無い、でも……許せない事はある。

「許さない……よくも……」

次回・第九話「朱雀・解き放たれる刻^{とき}」

「……あれが、一姫の力……」

第八話「乱世に響く、歌姫達の歌声に」(後書き)

あとがき

という訳で一姫のアイドルデビューですね、白花さんが少し壊れかけてますけど。

ついでといっちは何ですが鞘花もデビューしてしまいました。

「さやのでびゅーっ!!」

……………こほん、

さて、これからは遂に反董卓連合編に入って行く事になります。

桃香ともそこで再会する事になりますがどれだけ成長している事でしょう？

一姫は今回の事で更に覚悟を高めました。

最後の「葬送曲^{レクイエム}を」と、言う所がそれですね。

闘いの中で彼等を死地に追いやる覚悟をも持っているという事です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3415u/>

真・恋姫?無双一姫伝・魏

2011年9月11日13時46分発行